HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	『フランス・百科全書』の基本的立場
Author(s)	河西, 章
Citation	北海道大学人文科学論集, 5, 1-75
Issue Date	1967-07-10
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/34285
Type	departmental bulletin paper
File Information	5_PR1-75.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

『フランス・百科全書』の基本的立場

河西章

一

数年前、北海道大学・文学部では、その辞書資料室の備品として、『フランス百科全書』第三版、全三九巻を購入した。この余りにも有名で、かつ、余りにも読まれることの少ないと桑原武夫氏の嘆じた書物の現物を手にして、フランス思想史の研究にたずさわるものの一人として、憧れの高峯を前にしてのアルピニストたちのような一種の感慨を禁ずることはむずかしかったのであった。

従って、『百科全書』の研究にとりかかった動機という場合にも、私自身についてみれば、丁度、山がそこにあるから登るという登山家たちの理由といささか似ているといえるのであって、フランス思想史のこの巨大な峯は、いつかは登らずにすますことができなかったのである。

フランスの現代思想を論ずるものたちは、しばしば、フランス革命の時期にその源泉を求めるのであるが[1]、革命の生みの親たちの哲学思想や、宗教観、社会思想、科学思想、芸術論等々が、その多様性を損われることなしに集大成され、一つの統一へともたらされているこの『百科全書』のうちには、デカルト哲学、とくにその自然学の展開と克服[2]を通じて達成された、フランス近世思想史の不滅のモニュメントが見出されるとともに、同時に、フランスのみならずまたヨーロッパの現代思想が、そこに源を見出し、その継承と展開として自らを示しうるところの、フランス革命

の哲学の、近代精神そのものの、その上昇期の頂点にあった近代市民階級の世界観の、最も純度の高い表現が見出されうるのである。それ故、この峯を究めることなしに『近代』を語ることはできないのであり、また、その『近代』を把えることなしには、現代をも充分には語りえないといえるだろう。

また、現代における、ソヴィエト・ロシアや中国での革命が、フランス大革命の精神の継承であり、展開であり、同時にその乗り超えであるとするならば、『神聖家族』においてマルクスが、その基本的図式を描き出しているように[3]、フランス革命の哲学は、今日の革命の哲学の源泉として確認されねばならない。いいかえれば、マルクス以前の最も進んだ唯物論がそこには見出される筈である。リヴォーによれば、フランス革命の哲学とは、一七五〇年の時点でのフランス人のものの考え方に他ならず、内容的に言うならば、『百科全書・プラス・ルソー』であるとされている[4]。このことは言いかえれば、『ディドロ・プラス・ルソー』ということである。マルクスの源泉としての『フォイエルバッハ・プラス・ヘーゲル』は、『ディドロ・プラス・ルソー』にその原型を持つのである。

二

このような動機で、この膨大な文献の山に立ち向うに至ったのであったが、私自身がこの時、基礎知識として所持していたものは、わずかに、京大の人文科学研究所が桑原氏をリーダーとする共同研究の成果として示した『フランス百科全書の研究』（一九五四年）と、同じく小場瀬卓三氏の主宰のもとに科学研究費にもとづく共同研究の成果として著わされた『ディドロ研究』（上巻のみ、一九六一年）、および、同じ小場瀬氏が、その『ディドロ・自然の解釈に関する思索』の飜訳（創元選書）の巻末に附した論文、『ディドロの哲学と方法』[1]、また、前記の『神聖家族』におけるマルクスの基本的見解や、デボーリンの『唯物論史』でのディドロの把え方などを挙げうるのみであった。これらは、桑原氏らの研究を除いては、主としてディドロを中心とする研究であり、その限りで『百科全書』の諸項目、とくに

ディドロ執筆の部分に触れてはいるのだが、ディドロの諸著作にもりこまれたディドロの思想から出発して、それを手掛りに、それらの項目を把握するという形がとられることになっていて、『百科全書』そのものの特徴を全体として浮び上らせるという点では不満足という他はなかったのである。すでに、『百科全書』刊行の二百年記念に当る一九五一年頃、フランスのパンセ誌に現われた諸論文は、[1] ユベール、ル・グラらの先駆的な仕事を乗り越えて、『百科全書』そのものの新しい全体像への摸索のはじまりをつげていたが、この方向は、ソブールの、『百科全書テキスト抜萃』[3]（一九六二年）に至って、一つの自覚的な方法に結実した。プルーストは、その画期的な研究、『ディドロと百科全書』のなかで、[4]『百科全書』の諸思想を、まさに『百科全書』の諸項目にもとづいて、その中からのみつかみ出すというやり方の出発点を、前記の抜萃集の序論において、ソブールが簡潔に示した態度のうちに求めている。これらのことを考慮するとき、また、リヴォーや、ブレイエの『哲学史』すらもが、[5]『百科全書』そのものの諸項目にふれることを回避し、わずかに、ダランベールの『序論』や、『ジュネーヴ』の項などへの言及のみに止めているのを考慮に入れるとき、桑原氏らがすでに一九五四年という時点で、『百科全書』のテキストそのものに取組んでいたということは大いに賞讃されてしかるべきだと思われる。

以上のような理由で、『百科全書』を、その成立に参加した諸思想家の思想の単なる加算として把えることをやめて、むしろ、そのテキストの諸項目そのものの分析と、総合にもとづいて、生きた、統一的な『百科全書』の思想を発見し、それを、そこに参加したあの多様な思想家群の諸思想の把握の鍵として逆に利用するという途が、この『百科全書』が果した世界史的な役割にも、また、それが革命の哲学の形成に及ぼした巨大な影響力にもふさわしいものであると考える。

従って、桑原氏らの業績は、今日から見ればいくつかの不備を指摘せざるをえないとしても、さしあたり、われわれの研究の基礎として、また出発点として利用してさしつかえないと思われる。

それ故、私自身が、『百科全書』のテキストそのものに当ってみて、重要と思われる項目や、多くの頁数をさいている項目等を整理することから作業を始めるに当っても、桑原氏らの業績の、その敍述と、またとくに、その巻末の主要項目の一覧表とをさしあたりの手掛りとして利用して、それに、ソブール、プルーストらの新しい研究を参照しながら、まず気づいた点から補正を加えてゆくという方法を選んだのであった。今後の研究の第一歩として、ここでまず行なおうとするのは、このような補正の作業である。

三

『百科全書』の主要と思われる諸項目の選択に当ってみて、なによりも先ず痛感されたのは、この辞典全体を覆うディドロの巨大な影である。(1)

『百科全書』全体の中で、いわば扇のかなめの位置を占めるような諸項目、この辞典全体の姿勢を明確に示すのに適しているような諸項目の執筆者は、ほとんどディドロ、ダランベール、およびジョクールの三人に限られる。

他にも重要な項目は数多くあり、それらのうちには、ドルバックや、モンテスキュー、ケネー、ヴォルテール、ルソー、モンマルテルらの重要人物が執筆したものも入っている。

例えば、ルソー執筆の、経済 (*Economie*) の項や、音楽 (*Musique*) その他の音楽関係の項目、ヴォルテール執筆の歴史 (*Histoire*)、想像力 (*Imagination*)、フランス語 (*Français*) などの諸項目、ケネー執筆の小作農 (*Fermier*)、穀物 (*Grains*)、明証性 (*Evidence*) の項、ドルバック執筆の冶金学 (*Métallurgie*)、議員 (*Représentants*)、僧侶 (*Prêtres*)、神権政治 (*Théocratie*) などの諸項目、さらには、モンテスキュー執筆のただ一つの項目たる趣味 (*Goût*) の項、(2)(3) 終始匿名で参加したチュルゴの市場 (*Foire*)、存在 (*Existence*) などの項、グリムの敍情詩 (*Poème lyrique*) の項、また、無神論 (者) (*Athée, Athéisme*)、善 (*Bien*) などをはじめ、形而上学関係の数多くの項目を分担したイヴォン神父の執筆した

諸項目、法律学（*Jurisprudence*）、政治的法（*loi politique*）、フランス法（*Droit français*）、官職（*Charge*）、責務（*Obligation*）、代理人（*Commis*）、裁判（*Justice*）等々、主として法律学関係の諸項目を一手に引き受けた観のあるブシェ・ダルジ執筆にかかる諸項目、補巻の編者となり、また、批評（*Critique*）などの重要項目をも書いたモンマルテルの関係した諸項目、美学（*Esthétique*）などを書いたズルツェル執筆の項目、教会（*Eglise*）、カルヴィニスム（*Calvinisme*）、キリスト（*Christ*）、さらに精神（*Esprit*）、人間学（*Anthropologie*）、動物界（*Animalité*）、人間性（*Humanité*）、カトリック性（*Catholicité*）など、神学、宗教関係の多くの項目を受持ったマレ執筆の諸項目などなど、この『百科全書』のいずれ劣らぬ重要項目として、既に一定の評価を獲得し、無視できぬ発言力を持ちつづけているものの少くないことは疑う余地がない。

しかし他方、これらの諸項目を、たとえばディドロ執筆の次のような諸項目、技術（*Art*）、政治的権威（*Autorité politique*）、農業（*Agriculture*）、幸福（*Bonheur*）、確実性（*Certitude*）、キリスト教（*Christianisme*）、市民（*Citoyen*）、神々（*Dieux*）、自然権（*Droit naturel*）、折衷主義（*Eclectisme*）、百科全書（*Encyclopédie*）、エピクロス哲学（*Epicurisme*）、天才（*Génie*）、ギリシャ人の哲学（*Philos. des Grecs*）、ホッブス哲学（*Hobbisme*）、人間（*Homme*）、非唯物論（*Immatérialisme*）、不寛容（*Intolérance*）、非宗教的（*Irreligieux*）、ジャンセニスム（*Jansénisme*）、日本人の哲学（*Philos. des Japonais*）、ジェジュイット（*Jésuite*）、イエス・キリスト（*Jesus-Christ*）、ユダヤ教（*Judaïsme*）、正、不正（*Juste, Injuste*）、ジャーナリズム（*Journalisme*）、立法者（*Législateur*）、自由—市民的、自然的（*Liberté civile, naturelle*）、ライプニッツ哲学（*Leibnitzianisme*）、ロック（*Locke*）、論理学（*Logique*）、自然法（*Loi naturelle*）、奢侈（*Luxe*）、マールブランシュ哲学（*Malebranchisme*）、習慣（*Mœurs*）、モーゼの哲学（*Philos. Mosaique ou chrétienne*）、自然的（*Naturel*）、出生（*Naître*）、情念（*Passion*）、平和（*Paix*）、政治学（*Politique*）、哲学（者）（*Philosophe, —phie*）、プラトン哲学（*Platonisme*）、ペリパトス学派の哲学（*Philos. Péri-*

Pathéticienne)、多神論 (*Polythéisme*)、権力 (*Pouvoir*)、先入見 (*Préoccupation*)、特権 (*Privilège*)、予言 (者) (*Prophète, —tie*)、生産 (*Production*)、摂理 (*Providence*)、慎重さ (*Prudence*)、権力 (*Puissance*)、ピューリタン (*Puritain*)、懐疑論哲学 (*Philos. Pyrrhonienne ou Sceptique*)、ピタゴラス哲学 (*Pythagorisme*)、理性 (*Raison*)、推論 (*Raisonnement*)、ローマ人の哲学 (*Philos. des Romains*)、サラセン人の哲学 (*Philos. des Sarrasins ou Arabes*)、スコラ哲学 (*Philos. Scholastique*)、感覚 (*Sensation*)、感情 (*Sentiment*)、社会 (*Société*)、ソクラテス哲学 (*Philos. Socratique*)、主権 (*Souveraineté*)、スピノザ (*Spinoza*)、ストア哲学 (*Stoïcisme*)、自殺 (*Suicide*)、トマジウス (*Thomasius*)、暴君 (*Tyran*)、真理 (*Verité*)、真らしさ (*Vraissamblance*) 等々々。

また、ダランベール執筆の次のような諸項目、

絶対 (*Absolu*)、作用 (*Action*)、空気 (*Air*)、代数学 (*Algèbre*)、分析 (*Analyse*)、一科学の他の科学への応用 (*Application d'une science à l'autre*)、天文学 (*Astronomie*)、熱 (*Chaleur*)、学院 (*Collège*)、デカルト哲学 (*Cartésianisme*)[4]、物体 (*Corps*)、発見 (*Découverte*)、定義 (*Définition*)、演繹 (*Déduction*)、証明 (*Démonstration*)、辞典 (*Dictionnaire*)、動力学 (*Dynamique*)、学院哲学 (*Philos. de l' Ecôle*)、科学の原理 (*Elemens des sciences*)、実験的 (*Expérimental*)、火 (*Feu*)、力 (*Force*)、ジュネーヴ (*Genève*)、重力 (*Gravitation*)、幾何学 (*Géométrie*)、無限 (*Infini*)、磁気 (*Magnétisme*)、数学 (*Mathématique*)、物質 (*Matière*)、力学 (*Méchanique*)、運動 (*Mouvement*)、自然 (*Nature*)、ニュートン哲学 (*Newtonisme*)、オプティミスム (*Optimisme*)、光学 (*Optique*)、振動 (*Oscillation*)、永久の (*Perpetual*)、物理学 (*Physique*)、比例 (*Proportion*)、質 (*Qualité*)、反射 (*Reflexion*)、体系 (*Système*) 等々々。

また、ジョクール執筆の次のような諸項目、

概念 (*Conception*)、意識 (良心) (*Conscience*)、身体 (*Corps humain*)、犯罪 (*crime*)、民主制 (*Démocratie*)、欲望 (*Désir*)、結果 (*Effet*)、自然的平等 (*Egalité naturelle*)、エゴイスム (*Egoisme*)、隷属 (*Esclavage*)、国家 (*Etat*)、自

然状態 (*Etats de nature*)、ヨーロッパ (*Europe*)、能力 (*Faculté*)、家族 (*Famille*)、フランス (*France*)、美食 (*Gourmandise*)、政府 (*Gouvernement*)、ギリシャ (*Grèce*)、戦争 (*Guerre*)、英雄 (*Héros*)、産業 (*Industrie*)、租税 (*Impôt*)、日本 (*Japon*)、政治的自由 (*Liberté politique*)、文学 (*Litterature*)、法 (*Loi*)、不幸 (*Malheur*)、医学 (*Médecine*)、君主制 (*Monarchie*)、貨幣 (*Monnoie*)、道徳 (*Morale*)、貴族 (*Noblesse*)、対象 (*Objet*)、オペラ (*Opéra*)、同位者 (*Pairs*)、紙 (*Papier*)、祖国 (*Patrie*)、罪 (*Péché*)、罰 (*Peine*)、絵画 (*Peinture*)、思想 (*Pensée*)、父 (*Père*)、人民 (*Peuple*)、詩、詩人 (*Poème, Poète*)、父権 (*pouvoir paternel*)、法王権 (*Puissance papale*)、宗教 (*Religion*)、共和制 (*République*)、革命 (*Révolution*)、ロシア (*Russie*)、賢者 (*Sage*)、サロン (*Sallon*)、科学 (*Science*)、感覚 (*Sens*)、性 (*Sexe*)、無智の世紀 (*Siècles d'ignorance*)、迷信 (*Superstition*)、同情 (*Sympathie*)、税 (*Taxe*)、寛容 (*Tolérance*)、単位 (*Unité*)、価値 (*Valeur*)、虚栄 (*Vanité*)、徳 (*Vertu*)、生命 (*Vie*) 等々々、——これらは、いずれも、多岐にわたる膨大な執筆項目中のごく一部の、比較的目につく諸項目であるにすぎないが、——と比較するとき、その執筆部分の量と質において、また、それらの項目が『百科全書』中で占めている位置から見て、一見して明らかな差違に気づかずにすますことは不可能である。

図式的に言えば、ディドロの執筆項目は哲学関係が多く、その中核部分は哲学史を含む哲学全般によって占められており、それに、社会思想、宗教思想、芸術、技術等のかなめをなす諸項目が附け加えられていて、その周辺に、他の百科全書的な諸項目が配列されていると言えるだろう。ダランベールではこれと対照的に、自然科学関係の諸項目、とくに、力学をはじめとする諸科学の総括的な説明がその分担部分の中心を占め、その周辺に、科学的精神に基づく旧思想への鋭い批判の項目が配列されている。ジョクールの執筆項目は、ディドロ以上に多方面にわたっているが、その分担の中心は道徳思想、及び、社会科学と哲学、道徳との接点をなすような部分が占めており、その周辺に、政治学関係の諸項目、宗教批判を含む宗教的な諸項目、それに文学、芸術関係の項目が附け加わり、それら全体に劣ら

ぬ比重で百科全書的な諸項目が附け加えられている。

そして、ディドロがその目的として規定したように、『百科全書』全体が、到来した『哲学の世紀』の全ての知の最も組織的な表現であろうとしたとするならば、[5]その中核をなすべき哲学思想の形成は、以上の分担区分から見ても、ディドロの任務であったということができるだろう。後にヘーゲルが、より高い純度で示しえたような、時代の諸知識の哲学的統一という理念の、近世における最初の現われがそこにはあったといえるだろう。[6]しかしまた、ヘーゲルの『哲学的百科全書』のように神学的な純化を完了していなかったが故に、逆に、諸科学・技術の生のままの内容が豊かな形でそこには遍在していることができたのであった。ダランベールの分担した諸項目は、ディドロの、『百科全書』や、『哲学』や、『懐疑論』、『折衷主義』、『感覚』、『理性』、『真理』、『確実性』、『ロック』、『キリスト教』、等々の諸項目に対する補足に他ならず、その『序論』や、『自然』、『物体』、『物質』、『力学』、『ニュートン哲学』等々は、この『百科全書』の哲学的中核たる『理性の哲学』[7]への科学の側からの補強である。

このような補助的な役割は、ジョクールの仕事において一層具体的である。例へば、『ギリシャ人の哲学』、『フェニキア人の哲学』、『日本人の哲学』等々を書くディドロにとっては、それぞれ、『ギリシャ』、『フェニキア』、『日本』などを受持つジョクールの仕事はまさに前提作業に他ならない。

それはまた、『感覚』(*Sensation*)に先立つ『感官』(*Sens*)と、それにつづく『感受性』(*Sensibilité*)を、『哲学』につづく『道徳』と『宗教』を、『自由』につづく『政治的自由』を、『幸福』に対する『不幸』を分担することでもあっただろう。その最も困難な諸時期を通じて、終始一貫ディドロと行を共にして、その天才を分ち持つことはできなかったとしても、少なくともその天才の光輝の届く範囲に留りつづけたのがジョクールであった。この両者の関係は、この意味で、マルクスとエンゲルスとの関係に似ていたと言えるだろう。[8]

『百科全書』は、宗教に対する一貫した批判とともに、現存する社会制度に対する同じく一貫した批判を、その最大

の特徴として指摘されるのが常である。[9] このうち、さきの『哲学』の宗教的領域への展開、宗教に対する当時における最も整合的な、説得力を持ちえた批判の仕事は、ディドロとジョクールが自ら行なった。[10] その『哲学』の社会科学的領域への諸展開も、さきの項目中に見出されるように、一部は、ディドロとジョクールが自らやっている。ドルバックの鋭い教会批判や、ケネーの重農主義的経済思想を示す諸項目、さらには、その過激さの故に、後にはこの『哲学』からはみ出て行こうとしたルソーの書いた諸項目についてさえも、この『哲学』と結びつけ、この『哲学』の展開として把握するときに、はじめて、それらをその統一ある姿において、それらがその時代に真に持ちえた意味において把握することが可能となるだろう。『百科全書』全体を覆うディドロの巨大な影は、その諸項目のうちに分け入る一歩ごとにますます大きく、ますます色濃くなって行くように感じられるのである。

四

このような『百科全書』全体を貫くものとしてのディドロの『哲学』は、さしあたりまず、彼がほとんど一手に引き受けて書いた哲学史関係の諸項目、とくに、『懐疑論哲学』(*Philos. Pyrrhonienne ou Sceptique*) と『折衷主義』(*Eclectisme*) などにその姿を現し出している。

『百科全書』全体の背後にP・ベールの『歴史的、批判的辞典』があり、[1] そこでの懐疑主義は何よりも先ず、『十七世紀の形而上学』へと向けられていた。

ディドロの、またディドロによって代表される『百科全書』の『哲学』は、この系譜に立つが故に、『ただ既存の政治的制度や、既存の宗教と神学にたいする闘争であったばかりでなく、十七世紀の形而上学および一切の形而上学、ことにデカルト、マールブランシュ、スピノザ、ライプニッツの形而上学にたいする、同じように公然とした断乎たる闘争』とならねばならなかったのである。そして、『フランスの機械的唯物論が、デカルトの形而上学に反対して

その自然学につながっている』が故に、また、その自然学の継承が、『医師ル・ロアとともにはじまり、医師カバニスによってその頂点に達し、医師ラメトリーがその中心にいる』ものであるからこそ、この時期の唯物論は生理学的、医学的色彩をも帯びざるをえなかったのであった。さきの『懐疑論』と『折衷主義』の二項目の内容は、『百科全書』の『哲学』がまさに、この二つの系譜の継承であるとともに克服であったことを端的に示している。(2)

百科全書家たちのこの系譜との関連は、例えば、彼等がそれに対する闘いを一つの使命と感じていた『迷信』に関するジョクールの敍述のうちにもはっきりと示されている。そこで最も有力な手掛りとされているのはモンテーニュに他ならない。また、イヴォンの書いた『無神論者』の項においては、スピノザの形而上学的思考に対するベールの批判がそのままの形で採用されている。

しかし他方、ディドロの『哲学』をここからのみ導き出すこともまた決してできないであろう。その『ピロニアンまたは懐疑論者の哲学』の項での、懐疑論に対するディドロの態度はかなりネガティヴである。(3)

懐疑のうちに単に最も確実と信じていたものの破壊のみではなくて、『理性の使用に際しての一種の節制』というポジティヴなものを見出すこと、いわばデカルト的な意味での方法としての懐疑を見出すことにディドロは努めている。

『百科全書』全体を貫くデカルト的理性への信頼は、多くの人の指摘する『百科全書』の『哲学』の第二の重要な特徴である。デカルト哲学が自然において確認し、形而上学において確認に失敗した理性的諸原理の、社会的次元での確認がこの『百科全書』に他ならない。『百科全書』がたとえば宗教的諸原理への批判を試みようとするとき、それはつねに理性と良識という規準に訴えつつ行なわれているといえるのである。(4)

にもかかわらず、その『デカルト哲学』の項については、執筆者自体がディドロではなくクールテペ神父に委ねられ、また、同神父執筆の部分に補足して書かれているダランベールの短い敍述そのものも、極めて素気ない、突き離

した書き方となっている。そこで肯定的に眺められているのは、後にル・ロア（レギウス）が受け継いで行ったような側面だけだったと言っても決して過言ではないであろう。

ディドロ自身の『哲学』から見れば、デカルトは、古くはプロティノス、近世に入ってはジョルダーノ・ブルーノ、ベイコン、カンパネルラ、ホッブス、ニュートン、ライプニッツ、トマジウス、マールブランシュらとともに『折衷主義』哲学の系譜のうちに位置づけられる。この系譜のうちには、さらに溯れば、アリストテレスが、プラトンが、ゼノンが、さらにはピタゴラスもが含まれる。この『自己の光明を誰にも従属させず、自分自身の眼で見、誤った事物を吟味なしに認める危険に身をさらすよりは、むしろ、真なる事物をも疑うという、ただ一つの共通の原則しかもたぬ人々の集り』に他ならないところの、『経験と理性の証言に依らないかぎりいかなることも認めない』、『思惟の自由』の所持者としての折衷主義者たちは、既成の『体系』をそのまま受け入れないが故に、先行する諸思想の自由な綜合を実現して哲学の歴史を推進する。この懐疑論と併行し、懐疑からポジティヴな成果を収めてゆくところの『折衷主義』というものを、哲学の歴史全体の、またとくに、その『十六世紀の終り以後』の、ほとんどすべての重要な思想家を包括する哲学史の主流として把えようとするこの思想史観を、ディドロが受けとったのは、この項での彼の叙述自身が証言しているように、J・ブルッカーからと推定される。ブルーストの研究が明らかにしているように、ディドロが受持った『百科全書』中の数多くの哲学史関係の項目は、驚くほど細部までブルッカーの叙述と対応している。[5] しかしここでもまた、哲学的・神学的問題に対する、この折衷主義の立場の真に組織的な適用は今後の課題として提示され、その限りでは、これらの古代の伝統的な形而上学的折衷主義と、近世の『実験的哲学』とは、『組織的な折衷主義』へと展開されねばならないとされている。デカルト哲学もまた受け継がるべきものであると同時に乗り越えらるべきものとして把えられていたのである。ダランベールの力学がデカルト的自然観に対する決定的な袂別であったのも、このことのいわば別の形での現われに他ならない。

それ故、根本的には同じ史観に立ったと見てさしつかえないダランベールの『序論』のうちで、同じく『百科全書』の『哲学』の先駆者として挙げられた、ベイコン、デカルト、ニュートン、ロック、ライプニッツらのうちで、ただロックのみが、さきの『折衷主義』のうちに組み入れられなかった唯一の名前であったのである。(6)

ディドロの執筆した『ロック』の項を読むとき、彼がこの偉大な経験論者から受取ったものがよく分る。そこに描き出されているロックは、デカルトの弟子として『キリスト教の合理性』(これをディドロが、理性的キリスト教—*le christianisme raisonable*—と訳していることは象徴的である。)を書き、また、あらゆる悟性的認識の基礎に感覚を置くとともに、その感覚の起源としての客観的実在の役割を明確に承認し、さらに、物質が思惟する能力を持つことを決して不可能とは見做していないところのロックである。恐らく今日の哲学史における平均的なロック像から見て、このロックは余りにも唯物論的だといえるだろう。しかしまた、この良識と実在論のロックというイメージそのものが、『百科全書』の『キリスト教』や、『感覚』等々の項に示されるディドロの『哲学』そのものの簡潔な模写に他ならないといいうるのであって、そのことは、ディドロその人の、また従って、『百科全書』全体の『哲学』の源泉がロックにあったという推定を裏書きすることにもなるのである。それ故、ベイルの懐疑主義と、デカルトの自然学から『医師ル・ロワ』を経て『医師ラメトリー』に至る機械的唯物論の基本線と、さらに、のちのディドロに明瞭な痕跡を残すスピノザ主義的汎神論と、ヴォルテールらを代表とする理神論の方向と、さらには、恐らくデイドロらも読んだと推定されるジャン・メリエの『遺言』に代表されるような無神論の方向と、『百科全書』に流れこんで、いずれも明瞭な地歩をそのうちに占めている当時の諸思潮の綜合と統一と折衷のかなめをなすものは、ロック哲学の唯物論的な諸側面、さらに言えば、ディドロによって実在論的に把えられた限りでのロックの哲学であったといえよう。言いかえれば、コンディアックを実在論的に克服した限りでのディドロその人が、そこには現われ出ているといえるだろう。この推定はまた、『百科全書』のうちにこそ、大革命の哲学の原初的な姿があるというリヴォーの推定

とも一致する。マクシム・ル・ロアの主張とはことなって、革命の哲学はまさに存在した。[7] 革命をリードし、とくに革命において成果を収めた階層の物の考え方は、その源をロックに、あるいは、デイドロによって把えられたロックのうちに持っていたにちがいない。ユベールが明らかにし、プルーストが補足した、『百科全書』の執筆者群の中心をなした階層の所在から見ても、[8] また『百科全書』と革命との間に介在した『イデオローグ』たちの思想の諸性格から推しはかってみても、[9] 『百科全書』は、革命に向って巨歩を印しはじめたフランス・ブルジョアジーの思想形成の産物としてのみ理解しうるのである。

五

以上のように見るとき、『百科全書』がバークリーとヒュームの思想について特に項目を設けておらず、また、それについて他の項目中でもあまり触れていないことは、多少とも奇異の念を与えずにはいない。飜訳者として世に出たディドロが、ヒュームはともかくとして、とくにその飜訳計画が『百科全書』の刊行・企画全体の基礎となった、チェンバースの『サイクロペディア』のうちに、明瞭に盛りこまれているバークリーの思想の重要性を見逃すということはありえない筈である。[1] 確かに、ディドロは、初期の著作、とくに『懐疑論者の散歩』などで、強くバークリーに反対し、またコンディアックの乗り越えのためには、原理的にはバークリー批判にまで溯ることの必要を強調してはいる。さきに見たようなロックの把握は、当然、ロックからバークリー、ヒュームへという展開を彼に極力拒否させることになるだろうが、ロックからの影響が自己の思索の中心に位置づけられればられるだけ、バークリー、コンディアックへの批判もまた中心的な課題とならねばならなかったであろう。そしてまた、この批判を何に依拠して、どのように行なっているかということの中に、ディドロの唯物論乃至は実在論を解く一つの鍵があるといえるだろう。『百科全書』の企画がほぼ形をととのえた時期に書かれた彼の『哲学的思索』(*"Pensees philosophiques"*)のやや過激な諸

断片のうちに見出される、理性と理神論への、そして、彼自身がその著書を仏訳し、またこの書中でも名を挙げたシャフツベリーの思想への共感に、その鍵を想定すべきであるのだろうか。[2] その執筆した『ホッビスム』の項の終りにおいて、ディドロが行なったホッブスへの批判は、主として、自然を良きものと見るか、悪しきものとみるかの問題をめぐっての、ルソーとホッブスの自然観の比較によって行なわれているが、同時に述べられている、ホッブスのベールに対する誤解への指摘と、ホッブスの、『スピノザのそれとほとんど異ならない』、無神論すれすれの神の観念への指摘をも考慮するとき、そこには、ホッブスの『悪しき自然主義』を斥けて、道徳をもっぱら人間的次元において考えて、正邪に対する『道徳的感覚』の養成に問題の解決を見てゆこうとする、シャフツベリー流の道徳哲学の名残りを見うることは確かである。もとより、シャフツベリーをディドロの思想の源泉と見ることはできないだろう。しかし、ディドロがシャフツベリーの著作の飜訳から彼の文筆活動を開始しているのもまた事実である。大切なことは、もしこの方向を辿るとすれば、いやおうなしにトーランドに行き当るということである。後年のディドロの、とくにダランベールへの批判に当って採らざるをえなかったスピノザ主義への傾斜というものも、[3] トーランドを延長してゆけば当然行き当るべき地点であったとはいえないであろうか。ディドロの唯物論を当時の唯物論のレヴェルから区別するところの、運動と一体化された物質の観念についてみても、それは、ニュートンに対するトーランドの反駁と一致する。デボーリンの『唯物論史』はこの点を極めて明瞭に指摘しているのである。[4] プルーストもまた、ディドロの唯物論のトーランドのそれとの親近性は、大いに可能な推定と見なしている。[5] ともあれ、ディドロの唯物論の源泉と本性の問題は、なお依然として一つのアポリアに止っている。恐らく、フランス唯物論の正統は、マルクスの言うようにデカルトとロックの統一としてのラ・メトリ、ドルバック、およびエルヴェシウスのうちに見出されうるだろう。ディドロの人間観における一貫した生理学主義と、医学的知識の重視は、『百科全書』の諸項目や『図版』にも、また晩年の『生理学綱要』のうちにも明らかであり、ディドロのうちにも、この正統が深く侵透していることを認めうる。[6] し

かしまた、ディドロの唯物論は、そのさまざまの洞察によって偉大であるとともに、また多少とも非正統的である。ここでは問題は、『百科全書』の諸項目に見出される『哲学』の質にあるのであり、その限りでは、今は、ロック哲学の唯物論的、ないしは、実在論的解釈ないし改造にその基本線にかかわるポイントの一つがあったろうこと、そして、このような解釈ないし改造に当っては、トーランド（あるいはメリエ）[7]の思想が重要な役割を果したかも知れぬということを推定するだけで満足するしかないのである。桑原氏らの研究は、この点について、ロックとコンディアックについて詳しく触れてはいるものの、ロックおよびコンディアックと百科全書家たちが、どこで一致するとともにどこで区別されるのかという点にも、またこの一致の限界を生じたものがどこからやって来たのかという点についても、ほとんど触れるところがないのである。確かに、『認識』の項などに見られるように、『百科全書』のロックへの依存は明瞭である。にもかかわらず、先に見たような諸観点もまた、諸項目を一べつするだけで既に明白なのである。

六

最後に、主要と思われる項目の選定に当って感ぜられたもう一つの特徴は、『百科全書』全体を貫く穏健さである。[1] ダランベールの『序論』はいわばこの穏健さを代表するに足る項目の一つであり、ディドロの『キリスト教』の項での穏健な批判の路線、[2]『議員』の項でのドルバックの代議制に対する温和な見解、その他、とくに社会思想関係の諸項目の総体的な穏健さは、『百科全書』の諸項目のすぐ目につく性格の一つである。これは、後のルソーと『百科全書』との離反のエピソード、また、後のディドロのエルヴェシウス批判をも先取するものといえるだろう。[3] 他方、『百科全書』の最大の敵たるジェジュイットに対しては、またそれが含んでいる迷信と宗教的ファナティスムに対しては、百科全書家たちはかしやくのない戦いをいどんでいる。[4] この対立とこの融和は、恐らく、彼等自身と、また彼等を支持した社会的勢力との本性から出てきたものにちがいない。この点についても、その後展開された諸思想から逆に溯

ってゆくことをやめて、出発点となるべき『百科全書』の諸項目に盛られた諸傾向のうちに、後の革命の全過程を通じて現象するに至ったフランス・ブルジョアジーの本質的立場への手掛りを発見してゆくことが必要となるだろう。

註

一

(1) たとえば、*L. Sève; La philos. française contemporaine* や、*M. Le Roi; Histoire des Idées en France t. I.* など。

(2) ダランベールの『力学論』(*Traité de dynamique, 1743*) は、フランスの自然科学思想が、デカルト流の自然観から、ニュートン物理学のそれへと移行する転機となった画期的なものと言われており、『百科全書』中の、*dynamique, méchanique, newtonisme* 等の諸項目はダランベールの思想の要約であるとともに、またデカルト的自然観の展開と、克服との試みに他ならなかった。

(3) *K. Marx; Heilige Familie, Dietz* 版、*3, d, s.s. 253～*. マルクスによって与えられたこの基本的図式は、レーニンが、『唯物論と経験批判論』の巻頭で与えたそれへの補足と相まって、マルクス主義の側からの『百科全書』と、とくにディドロとに対する解釈に一定の枠をはめる作用を持ったことは、たとえば、『ソヴィエト・アカデミー版、世界哲学史』の叙述を一見するときにも、(とくに第2巻、第7章の3) また、*Grosse Sowiet-Enzyklopädie, 27, Aufbau, 1954.* 所収のディドロの項、*s.s. 35～*. などによっても明らかである。しかし *1951* 年の *Pensée* 誌での、『百科全書』二百年記念の諸論文を一つのきっかけとして、ソブールやプルーストらの作業がそれへの補足、ときには修正となっていることも確かである。

(4) *A. Rivaud; Histoire de la philos., t. IV, Section III, Chap. XX,* とくに *p.p. 329～330.*

二

(1) 前記マルクスの基本図式と、エンゲルス、レーニンらのそれへの補足からの、この時期（一九四八年）における最も優れた展開と見なしうるこの論文のディドロ観は、わが国のディドロ研究者たちの考え方を相当に規制する力を持っていたものと思われる。六一年の研究においては、小場瀬氏の考え方は、『機械的唯物論の枠を破って、自然弁証法的洞察をも含むところの代表的唯物論者』というイメージから、『実在論者（レアリスト）ないし自然主義者ディドロ』のイメージへと進化して行っている。

(2) 一九五一年の *Pensée* 誌上で

J. Varloot; Le bi-centenaire de l'Encyclopédie (n° 38)

J. Dautry; La Révolution bourgeoise et l'Encyclopédie I, II, (n° 38, 39)

H. Denis; Deux Collaborateurs économiques de l'Encyclopédie; Quesnay et Rousseau (n° 38)

A. Soboul; L'Encyclopédie et le mouvement encyclopédiste. (N° 39)

M. Prenant; L'Encyclopédie et les origines de la science modernes. (N° 39)

などの論文が相ついで現れて、桑原氏らの研究がほぼ全面的に依拠した、ユベール、ル・グラらの戦前の研究*と、ソブール、プルーストらの戦後の研究との、丁度橋わたしの役割を演じているように見受けられる。これらの論文と、たとえば、デイドロ生誕二五〇年に当っての

J. Proust; La contribution de Diderot à l'Encyclopédie et les théories du droit naturel. 1963, Annales historique, n° 173.

また、同じプルーストの大著、

J. Proust; Diderot et l'encyclopédie, 1962, Armand Colin.

などとの間には、その基本的観点で多くの差違が見受けられるが、同時にそれらが、プルーストなどの、『百科全書』そのものへの歴史的研究のきっかけとなったこともまた否定できないであろう。

(*R. Hubert; Les sciences sociales dans l'Encyclopédie; la philos. de l'histoire et le problème des origines sociales, 1923. R. Hubert; Rousseau et l'Encyclopédie, 1928.*

J. Le Gras; Diderot et l'encyclopédie, 1928, etc.)

(附記。これらの諸論文に関しては、本学フランス語科講師中山氏のご教示に負うところが多かった。ここに記して一言感謝する次第である。)

(3) *A. Soboul; Textes choisis de l'Encyclopédie, Editions sociales, 1962.*

(4) *J. Proust; Diderot et l'Encyclopédie, pp. 12~13.*

(5) *A. Rivaud; Histoire de la philos., t. IV, Chap. VII, pp. 96~.*

E. Brehier; Histoire de la philos., t. II, 2, Chap. X, pp. 444~450.

三

(1) 『百科全書』の研究が、結局ディドロ研究に帰着したり、また逆に、ディドロ研究から、『百科全書』への入口と導きの糸をとも与えられるという例が極めて多い。『ディドロと百科全書』といった表題は、例えば、プルーストの前掲の書物や、旧くは、ル・グラの同じく前に掲げた書物などのような研究書の場合にも、またリヴォーのそれのように哲学史的叙述の場合にもしばしば見受けられる。フランス以外の他の国でも、たとえば、最近フランスの啓蒙思想についての研究が進展しているように見えるアメリカなどでも、ダランベールの『序論』の英訳を行なった、*R. N. Schwab, W. E. Rex* らの仕事（一九六三年）などの場合のように、『百科全書』そのものに『ディドロの』(*Diderot's, of Diderot*) という限定をつけて表題とするものが非常に多い。実際、多様で、それぞれ個性的な多くの思想家群を何とかまとめて、執筆項目を割り当て、調整したり、相互の違和感や反目をやわらげたり、また出版社や、さらには当局との骨の折れる折衝に当ったりなど、編集上の仕事そのものが、それに適したディドロという人格なしには恐らく不可能であったであろう。また、その思想家たちの諸思想を、その多様性を保存しつつ、中心的なある志向の周囲に配置して、それらの諸思想が全体として、フランス・ブルジョアジーの穏健ではあるが、他方断固たる変革への意志の表現となりうるように、内容的にも統一を与え、一貫する一つの思想のかたまりへと練りあげてゆくという作業をなしとげるためには、極めて包容力があるとともに、原理的な問題では明確で一貫した態度を堅持しうるような頭脳が必ず存在せねばならなかった。いいかえれば、ディドロという天才がもし存在しなかったとするならば、『百科全書』が日の目をみることがなかったことだけははっきりしているのである。ルソーやヴォルテールなどのような、思想的にも、人間的にも強烈な個性を持ち、かつディドロとは肌の合わなかった天才たちを、なだめ、すかし、また離反されても落胆することなく、他の誰でもが抛げ出したくなるような多くの困難な場面をも、見たところやすやすと乗り切ってしまったということは、どんなにこの仕事が彼に適したものだったかということを証明している。無名の一翻訳家のうちにこの能力を見抜いて、この世紀の大事業を委ねた出版者の中心人物ル・ブルトンの眼識もまた、この限り高く評価せねばならないであろう。

(2) この項は、ドルバックの執筆項目中の代表的なもので、ここに述べられているイギリス流の代議制への肯定的な態度は、後のルソーの否定的な態度といちじるしい対照をなすとともに、やがて、革命において終局的には成果を収めたフランス・ブルジョアジーの基本的な態度が、『百科全書』全体を貫いていることの一つの証拠として挙げられる部分となっている。桑原氏らの研究で、この項がディドロの執筆とされていることの理由は不明だが、この路線という点ではディドロのものであってもおかしくはない。桑原編前掲書、一四七頁以下、および巻末の項目一覧参照。ルソーの思想と『百科全書』のそれとの相違点については、桑原編、『ルソー研究』、

（一九五一年）三八～四四頁参照。

(3) モンテスキューの果した役割については、36巻目の巻末の *Eloge de M. le Président de Montesquieu* が詳しく述べている。そこで、この『趣味』の項についても触れられている。

(4) 『カルテジアニスム』の項は、(C)の記号で指示されるクールテペ神父の分担項目であったが、同神父の書いた部分の後に、(O)の記号で指示されるダランベール執筆の一頁分ほどの補足が附け加えられている。内容的に興味があるのは明らかに後の部分である。なお、『百科全書』では、常連の執筆者は普通、その項目の終りに、たとえば(X)―イヴォン神父、(G)―マレ神父のように、記号で指示されており、寄稿の論文はおおむね項目の終りにその名前が明記されている。常連の執筆者でもジョクールのように、その名が(*D.J.*)のように記号化される他に、*L'article de M. le Chevalier de Jaucourt* のように明記される場合もあるものもあり、またディドロのように、その執筆項目が主として項目のはじめの星印（*）で指示されるとともに、また多くの無印の記事を書いている旨がことわってあるような場合もある。執筆者の記号は、第三版（北大文学部収蔵）のものでは、第7巻の巻頭の *Marques des Auteurs* がとくに詳しく指示している。

(5) ディドロ執筆の *Encyclopédie* の項。この項の始めの部分でディドロは『百科全書』の目的と、その企画を貫く精神をはっきりと規定している（*cf. Sobul; Textes choisis, p. 82～.* の *"Editeur"* の項―*l'article de Diderot*―）。なおこの点については当然、ダランベールによる『序論』と、ディドロが一七五〇年に、刊行に先立って書いた *"Prospectus"* も関連を持ってくるが、上記の項での叙述が企画の目的と精神という点ではもっとも端的である。（*cf. Riviaud; loc. cit., p. 101*）

(6) ヘーゲルの『哲学的百科全書』の理念とのつながりについては、リボーが触れている（*Riviaud; ibid., p.p. 99, 104 etc.*）

(7) 『百科全書』全体が、デカルトの理性＝良識の哲学の展開という面を持つ。この観念は、ディドロの書いた『哲学』、『哲学者』の項にもはっきり現われており、また、ソブールも指摘している点である（*Sobul; loc. cit., p.p. 188～*）。このことは、哲学史的項目中の重要部分の一つ、『折衷主義』の項からもはっきり読みとれる。そして、この面では『百科全書』とフォントネルとの関連が重要になってくる。*Proust; loc. cit., p.p. 205～7, surtout, 239.*

(8) 『百科全書』の刊行に当って果したジョクールの役割、彼が『百科全書』全体のうちで占める位置は、一つの重要な課題となっている。これについては、たとえば、*R. N. Schwab; The extent of Jaucourt's Contribution to Diderot's Encyclop., M.L.Q. 1957* などの研究があるが、桑原氏らの研究では、ジョクールは、ロカフォールの言葉を借りて、『まったく独創性のないところがその独創的なところ』とされ、『無理論の代表』として挙げられている（同書二七〇頁など）。このような評価はいわば一般的なもの

だが、在野で、教養、思想傾向など多くの点でディドロと近いジョクールの協力なしには、少くとも『百科全書』の刊行がスムーズには行かなかっただろうことは明らかである。

(9) たとえば、ソヴィエト・アカデミー版、世界哲学史、第2巻、五九八頁など。また、*Rivaud; loc. cit., p. 95.*

(10) ディドロが迷信と宗教的ファナティスムへの闘いのために書いた代表的な項目として、*Agnus Scythicus, Aigle, Alcatrace* などを挙げることができる。これらと、ジョクールの *Superstition, Tolérance* などの項とを比べるとき、彼等のこの方向への力の入れ方と、その基本姿勢がよく分る。これらの諸項目の意義については、ソブールの解説が役に立つ。*Soboul; loc. cit., p.p. 45~48, 245~7.*

四

(1) このことは、プルーストも、桑原氏らもみな認めている。*Proust; loc. cit., Chap. VII, surtout, p. 239, p. 275,* 桑原編前掲書二一頁など。『百科全書』の刊行に先立つ、ディドロの第二番目の著作、『懐疑論者の散歩』(一七四七年)での宗教に対する態度などのうちにも、その痕跡ははっきりと認められる。なお、*R. H. Popkin* によるベールの *"Dictionnaire historique et critique"* の抜萃英訳の *Introduction,* および *Pyrrho* の項 (*p.p. 194~*) をも参照。

(2) ここでの引用は、さきに触れたマルクスの『神聖家族』の『フランスの唯物論に対する批判的戦闘』の部分からとっている。『百科全書』の『哲学』が、『懐疑論』と『折衷主義』のいずれに対しても結局批判的であったことは、その項目自体の叙述によって明らかだが、プルーストはこの点を明確に指摘した。*Proust; loc. cit., Chap. VII, p.p. 241, 272 etc.*

(3) 前註、および、*Proust; ibid., p. 237 etc.* またすでに、彼の最初の著作『哲学的思索』の断片、一七、二四、二八、三〇、三一等々においても、理神論への肯定的態度という代価を払ってではあるが、ピロニスムへの否定的な態度が示されている。

(4) 『神聖家族』の中の前記の部分で、マルクスは、フランス唯物論の源泉としてデカルトとロックを挙げているが、サルトルも、その『弁証法的理性批判』の序論のうちで、十八世紀をデカルト哲学の大衆化の時期として把えている。*Sartre; Critique de la raison dialectique, p.p. 15~17, et notes de p. 15, de p. 16.*

(5) *Jacob Brucker; Historia critica philosophiae.* ブルッカーの史観と、各哲学に対する扱い方は、全面的に『百科全書』のうちで再生産されているとされる。『百科全書』の哲学史関係の諸項目中には、ブルッカーの当該部分の翻訳に近いものがかなり多いと推定されている。(*Proust; loc. cit., p. 255 etc.*) そして哲学史におけるブルッカーの方法は、基本的にはデカルト的なものだったとい

われる。(*cf. Proust, ibid., p. 250*)

従って、デイドロが究極的にはブルツカーの方法をはみ出していることもまた明らかである。

(6) リヴォーは、『百科全書』の『哲学的諸観念の基礎は、コンディアックを通じて、ロックからやって来た。』と、述べている。*Rivaud; loc. cit., p. 103.*

(7) 前註一、(1)および(4)をも参照。*Rivaud; ibid, p.p. 329~31, M. Le Roi; Histoire des Idées sociales en France, t. I, p. 369.*

(8) *Proust; loc. cit., p. 12, et Annexe I, p.p. 511~29.* また、桑原氏編前掲書、二七頁以下。執筆者や協力者についての研究を主として『二十世紀ラルース』のリストによった桑原氏らに比して、プルーストの研究はより前進している。しかし、ユベールが指摘した基本的なこと、すなわち、『貴族も（剣の貴族も法服の貴族も）、聖職者も、金融業者も、さらには *"grande Bourgeoisie"* と呼ばれうるような人々も』、『百科全書』では重要な役割を果すことはなかったのであり、この事業への協力者の重要部分は、第三身分から、中でもとくに、『学識ある中産階級、弁護士、医師、教授、アカデミー会員、実業家、工場主たち』から成っていたという事実は揺がない。

(9) イデオローグについては、さしあたり、桑原編『フランス革命の研究』第五章の二の*1*、とくに*2*参照。*cf. Rivaud; loc. cit., Section IV, Chap. XXII.*

五

(1) *E. Chaimbers; Cyclopaedia or an Universal Dictionary of Arts and Sciences, 1728, London.* この辞典の飜訳計画が、ふくれ上り変質して、後の『百科全書』の企画の第一歩となったことはよく知られている。*H. M. Bracken; The Early Reception of Berkeley's Immaterialism (1710~1733), M. Nijhoff, Hague.* によれば、チェンバースの辞典中にはバークリーの『人知原理論』の思想に依拠したいくつかの項目があったとされている。(*p. 34 cf.*) 従って、この成功した辞典の飜訳者として白羽の矢を立てられたデイドロが、バークリーの思想を充分に知らないということはありそうにない。一七五一年よりはじまった『百科全書』に先立って、一七四七年に書いた『懐疑論者の散歩』のうちにおいて、すでにデイドロははっきりとバークリー主義への批判を表明しているのであり、また当の『百科全書』においても、『内部感覚』(*Sentiment intime*) の項などには、はっきりしたバークリー批判も見うけられはする。それ故、問題は、デイドロの他の著書から帰納してではなくて、『百科全書』の諸項目そのものから見て、

ディドロやジョクールやダランベールが、バークリー（やヒューム）をどう見ていたか、また、それと関連して、コンディアックをどのように見ていたかを知ることである、この点については『抽象』の項や、『感覚』、『経験』の項など、調べてゆけば何らかの解答に行き当りうるような項目も少くない筈である。しかし、少くとも今までのところ、さきの『内部感覚』の部分を除いて鮮明な叙述を見出すことはできなかった。

cf. Soboul; loc. cit., p.p. 240~2, また、小場瀬氏『ディドロ研究』上巻、五七頁以下、とくに、六二頁参照。

(2) 『哲学的思索』、断片一三等。ディドロの哲学活動の第一歩は、シャフツベリーの書物の自由訳、(*Essai sur le Mérite et la vertu*) であったが、この著作ですでに試みられている宗教批判の基本線はベールにあったようである。（小場瀬氏、前掲書、四四頁以下）

cf. Œuvres philosphiques de Diderot, Textes établis par p. Vernière, Classiques Garnier, "Pensées philosophiques" XIII, p.p. 14~15.

なお、これらの初期の著作でしばしば見られる、パスカルやモンテーニュへの言及も、『百科全書』のうちでは潜在化してしまう。たとえば、パスカルについても、発見しえたのは、わずかに『ポール・ロワイアール』の項での一行足らずの叙述のみだった。しかし、モンテーニュの場合にはとくにそうなのだが、『モンテーニュ』という項目は見出されなかったけれども、その思想の浸透と、それへの関心が、明瞭に読みとられるようないくつかの項目が存在する。パスカルについても他に同様な項目がないとは決して言いきれない。ただ今までのところ、研究書中にも、そのような指摘は存在せず、関連のありそうな項目中にも、明瞭な言及は見出しえなかった。

(3) ダランベールに対するディドロの批判は、両者が協力関係を断った一七五八年以後そう経たない時期に書きはじめられている。『ダランベールの夢』や、『ダランベールとディドロとの対話』はいずれも、一七六九年代に書かれたとされているが、それらの中でディドロは、ダランベールのニュートン物理学風の自然観に対して、自己のスピノザ主義的な自然観を対立させている。しかし、少くとも、『百科全書』そのものに即して見るときは、ディドロとダランベールとの後年の疎隔は、その諸項目のうちにはほとんど見出されない。ダランベールの『序論』の線に、両者の考え方は統一されていたように見えるのである。

(4) デボーリン、永田訳『唯物論史』、第五章、5、とくに、一六八頁以下。

(5) *Proust, loc. cit., p. 292, Vernière, loc. cit., p.p. 249~55,*

(6) 後年のディドロがスピノザ主義への傾斜を見せた根本の理由としては、後にヘーゲルに至ってその意味が明らかとなるように、機械論的自然観から超え出てゆくためには、どうしてもスピノザの汎神論を一度は通り抜けなければならなかったからに他ならないの

だが、さしあたりは、人間観のうちから機械論的なものをできるだけ駆逐して、スピノザ自身がそうだったように物活論的な見方をとり入れてゆく必要があったからだと見てもさしつかえないであろう。『百科全書』中のディドロが執筆した『人間』の項は、全体のうちでも重要な項目の一つだが、そこを貫く根本的な人間観は極めて生理学的である。ラ・メトリーらの機械としての人体という観念は、ディドロのそれとはかなり異るものといわねばならないが、医学を重視し、生理学に人間の情念解明の基礎を求めたデカルトの『情念論』の原則は、ディドロのうちにもその名残りを留めているといえるだろう。*L'Encyclopédie et le progrès des sciences, et des techniques, P.U.F. 1952, p.p. 10～. J. Rostand ; La conception de l'homme, selon Helvétius et selon Diderot, et l'article par le même auteur ; p.p. 150～, Diderot et la bilogie.* および、小場瀬氏、前掲書、五、人間論、一七三頁以下。*E. Callot ; La philos. de la vie au XVIII^e siècle, 1965, Chap. VI, p.p. 245～.* などを参照。

(7) トーランドを想定するにしても、また、ヴェルニェールのようにメリエを想定するにしても、溯れば結局スピノザを想定していることになる。この意味では、ディドロが『盲人に関する手紙』(一七四九年)の中で、決定的に唯物論に移行した際に、ロックとスピノザの影響下にあったのだという小場瀬氏の考え方も(同書、七七頁)結局は同様のことを言おうとしていることになる。ただこのように考える場合でも、後の『自然の解釈に関する思索』のうちで頂点に達しているような、当時の自然科学の水準に対するディドロの洞察がなければこのような移行はありえなかっただろう。その意味では小場瀬氏が註で触れているヴェンツリの考え方の方が妥当性を持っているのかもしれない。(*Venturi, Fr. ; Le origine dell' Encyclopedia, 1946, l'article cité par Rivaud ; loc. cit., p. 105.*)

六

(1) *Rivaud, loc. cit. p. 97.*

(2) 桑原編、前掲書、第二章、宗教思想、とくに、一一六～七頁。『百科全書』での、また、初期におけるディドロの宗教思想はロックのそれにかなり近いものである。『理性的なキリスト教』というのがその基本的なラインであり、この意味で、初期および『百科全書』でのディドロは、ヴォルテール流の理神論に組しない。ベール流の懐疑論にもとずく宗教批判に対しても、初期のディドロは、さきに見たように一線を画そうとするのである。

(3) エルヴェシウスとディドロとの対立点については、前掲、*Rostand* の論文参照。また、小場瀬氏、前掲書、一九三頁をも参照。

(4) 『百科全書』の最大の敵がジェジュイットであったということは、逆に言えば、その支持者層が、当時の、反ジェジュイット勢力、ジェジュイット嫌いからなっていたことをも意味する。実際、マダム・ド・ポンパドゥールをはじめとする上層階級の人々の、『百科全書』へのひそかな、しかし絶大な支持の一因はジェジュイットとのその対立にあったのである。

資料 I

ロックの哲学（近世哲学史）[1]

ジョン・ロックは、ブリストルから七、八マイルのリントン（*Wrington*）に、一六三二年八月二十九日に生れた。彼の父は内戦の時期に、議会側の軍隊に勤務した。戦争騒ぎにもかかわらず、彼は自分の息子の教育に心を配った。初歩的な勉強をすませてから、彼は息子をオックスフォード大学にやったが、そこでは息子はあまり進歩をみせなかった。カレッジでの修業は彼につまらないものに見えたので、もし、偶然にも、デカルトの著作のうちのいくつかが彼の前に現われて、今没頭させられているものよりもずっと満足のできる学説があるのだということを、また、生来の無能の故と彼の思っていた学問嫌いが、実は、自分の師たちへのひそかな軽侮の念にすぎなかったのだということを、彼に教えてくれなかったとするならば、この優れた精神も、恐らく何も産み出すことはなかったであろう。[2] 彼はデカルト哲学の研究から医学のそれへと移って行った。つまり、彼は、解剖学、博物学、および化学の知識を得、人間を極めて多くの興味ある観点のもとに考察した。形而上学を書くということは、永い間医学を実地に習った人にのみふさわしいことである。というのは、人間の諸現象を、平静だったり狂暴だったり、弱々しかったり元気がよかったり、健康だったり傷ついていたり、錯乱していたり正常だったり、ずっとぼんやりしていたり、頭がはっきりしていたり、愚かだったり、騒々しかったり、ものを言わなかったり、不精だったり活動的だったり、生きていたり

死んでいたりする、この人間という機械を実際に見たことのあるのはそういう人だけだからである。

ロックは、ついで、ドイツとプロシャに旅行した。そして、情念と利害とが人々の性格に及ぼしうる影響を吟味した。[3] オックスフォードに帰ってから、彼は引きこもり、世に隠れて、自分の研究に専念した。人が学者となり、かつ貧しいままでいるのはこのようにしてなのだが、ロックもそのことは承知しており、ほとんど気にかけていなかった。後にシャフツベリーの名であのように有名になったアシュリー勲爵士が、その提供した年金を通じてよりも、むしろ、尊敬と、信頼と、友情の念を通じて、この哲学者に傾倒するようになった。[4] 人はロックから真に価値ある人を得たわけだが、それを金で買ったわけではない。それは、自分の黄金を全ての尺度とする金持ちたちが、恐らくイギリスでのほかは知っていないことなのである。貴族が学者の忘恩に不平を言わざるをえなくなるといったことは稀である。われわれ学者は愛されることを欲しているのだが、ロックはまさに、アシュリー卿に、バッキンガム公爵に、また、ハリファックス卿に愛されたのである。自らの称号よりはむしろ自らの明智を熱望して、彼らはロックと肩を並べようとして果さなかった。ついで、ロックはノーサンバーランド伯爵とその妻に随行して、フランスとイタリーにでかけた。また、アシュリー卿の息子の教育に当ったので、この貴公子の両親は、彼に、その教え子の結婚についての配慮を委ねるに至った。この哲学者が、かかる敬意のしるしに対して、黄金入りの財布を贈られた時ほどにも感動しなかったとはとても思われない。

その頃彼は三十五歳になった。彼は、人が真理の探究でなしとげうる一歩一歩は、その手段がよりよく知られえない限り、常に不確実なものだということを知っていて、人間悟性についての彼の試論[5]を企てるに至った。それ以来、彼の運命は幾多の変転をこうむり、その保護者たちの好意によって彼が就任した多くの職をたてつづけに失った。彼は肺結核に冒され、自分の国を離れて、フランスにやって来たが、そこで、最も高貴の人々に迎えられた。彼はアシュリー卿に随行して、好境も不遇も卿とともにした。ロンドンに帰ってからも、彼は永くはそこに留らなかった。

彼はオランダに安住の地を求めることを余儀なくされて、そこでその偉大な著作を完成した。権力者たちというものは全く首尾一貫しないもので、彼らは、その才能によって自分たちの支配する国に栄光をもたらした人々を迫害したりする。イギリス国王もまたロックの引退に心を傷げられて、オックスフォードのカレッジの名簿から彼の名を削除せしめた。その後、彼を惜しむ人々が赦免を請願したが、当のロックは、自らの犯したことのなかった罪を認めることになるかもしれないような恩赦を激しく拒絶した。激怒した国王は、施政への不満からモンマス公爵と結びついて謀叛を企てた八十四人の人々とともに、ロックをも国会に告発せしめるに至った。ロックはその企てには深入りしていなかった。というのは、彼はモンマス公爵をあまり重んじておらず、また、彼の計画もロックには危険をはらんでいるとともに、撞着を含んでいるもののように見えたからである。そこで彼は公爵と別れて、アムステルダムからユトレヒトへ、ついで、ユトレヒトからクレーヴへと逃れ、そこでしばらく隠れて暮したのであった。(6)

しかし、国の動乱もやみ、彼の無実も判明したので、彼は呼びもどされて、不当にも剝奪されていたアカデミーでの栄誉を返還されることになり、重要な地位を提供されることになった。オレンジ公妃を運んだのと同じ艦隊に乗って、彼は祖国に帰って行った。(7) ヨーロッパの諸宮廷に使いすることは、もっぱら彼の仕事となったのだったが、その休息と冥想への好みから公的な仕事を離れて、一六九七年にいたってやっと日の目を見るに至った、その人間悟性論の仕上げにとりかかった。政府がロックの赤貧と無名に恥ぢ入ったのはその頃のことであった。彼は、通商、植民地、農園のために設けられた委員会に入ることを余儀なくされた。弱っていた彼の健康は、このような重職に長期間従事することを許さなかったので、彼はその職に附随する報酬を何ら失うことなくそこから脱け出して、ロンドンから二五マイルほどの、マーシャム伯爵の領地に隠退した。(8) 彼は、市民の支配についての小著 (*de imperio civili*) を公けにして、その中で、専制と暴政の不当と不都合をあばき出した。(9) また、その田舎の地で、児童の教育についての論文、(10) 宗教的寛容に関する手紙、(11) 貨幣についての書物(12)などを書き、また合理的キリスト教(13)と題する風変りな著作を

著したが、その中で宗教と聖なる書物の一切の神秘を追い払い、宗教改革者のイエス・キリストを信仰し、自然法を実践する人々に永生への門を開いてやっている。この著作は彼に対する憎しみと争論を惹き起し、そのため彼は仕事を嫌うようになった。その上健康も悪化していたので、ひたすら休息と聖書を読むことに没頭するに至った。彼はこれまでの経験では、いつも夏が近づくと元気をとりもどしていた。しかし、このたびはこの季節も彼にそのような効果を生み出すに至らなかったので、そのことから彼は自分の命の終りを推察したが、この推測は余りにも真実でありすぎた。両の脚が膨れあがり、彼は周囲の人々に自分の死を予告するに至った。急速に力の衰えてゆく病人たちは、ある期間に自分が失ったものからして、自分のうちになお残る力でいつまで生きてゆかれるかを予感して、その計算をほとんど誤らぬものである。一七〇四年一一月八日、この思想の巨匠ロックは、あたかも目覚めていて、もはや再び目覚めることのないときまで時折まどろむ人のように、肱掛椅子にかけたままで亡くなったが、その最後の日は、われわれのふだんの生活と全く似たものだった。

彼の人柄は、才気があって誤ることなく、冗談をいうが苦味はなく、秩序の受好者にして、争論の敵であり、進んで他人に相談するとともに、自分の方でも他人に助言し、人々の気質と性格とに自分を適合させ、いたるところに啓発されたり教育したりする機会を見つけ出し、技術に関するあらゆる事柄に好奇心を持ち、怒るのも早ければ平静にかえるのもす早く、紳士であり、カルヴィニストというよりもユニテリアンであったのである。(14)

ロックは、感覚のうちに予め存在しなかったいかなるものも、悟性のうちには存在しないという古い公理を復活させ、そこから、どんな思弁的な原理も、また、道徳上の生得観念も存在しえないということを引き出した。(15)

そこからまた彼は、次のような他の極めて有益な結論をも引き出すことができたのであった。つまり、全ての観念は最後まで分解してゆけば感覚的表象に解消される筈であり、また、われわれの悟性のうちにあるものは全て感覚と

いう通路を経て来ているのだから、われわれの悟性に由来するものはいずれもみな、架空のものであるか、それとも同じ途を溯って我々の外に、それと結びつけらるべき感覚的対象が見出さるべきであるかのいずれかだということである。[16]

そのことから哲学における、ある重大な原則が生じてくる。つまり、そのものと結びつけられうるような感覚的対象をわれわれの精神の外に見出しえない全ての表現は、意味を欠いているということである。

これまでしばしば、観念でないもの、またその原理上観念でありえないものが観念と見なされてきたように思われる。たとえば、寒さや暑さ、快や苦、記憶、思考、反省、睡眠、意志等々がそのようなものなのだが、それらは、われわれが経験したことがあり、それらに対して記号[17]を作り出した諸状態であって、われわれがそれらを経験することをもはややめたとき、われわれはそれらについて何の観念も持つことはないのである。私はある人に、彼が楽しんでいないときに、快という語で意味するものを、また、苦しんでいないときに、苦痛という語で意味するものを尋ねてみる。白状するが、私にとっては、その吟味は無駄であり、私は自分のうちに、ある対象を求めたり、または避けたりするためのしるしとなる言葉しか覚知することはないのである。実際それらはそれ以外のものではありえない。ところで、それらがそれ以外でありえないということは大きな不幸である。というのは、もし、発音されるか、あるいは思い浮べられた快という語が、われわれのうちに何らかの感覚、何らかの観念を喚起するものであるならば、そしてもし、それが単なる音声ではないとするならば、われわれはその語がわれわれに快を与える分だけそれだけ、また、そのたびごとに、幸福になりうることになるだろうからである。[18]

ロックや他の人々が観念について、また、われわれの観念の記号について書いた全てのことにもかかわらず、私はこの問題を全く新たなものとして、それらについての認識が、精神という名の機械を大いに単純化して、文法という名の学問を大いに複雑化するところの、無数の真理の手つかずの源泉と考えている。真の論理学というものは極めて

わずかの頁数に縮められうるであろう。しかしまた、この研究が短縮されればされるだけ、言葉の研究はそれだけ長いものとなるに至るだろう。[18]

熱心に省察したならば、人はおそらく次のことを発見するだろう。つまり、第一に、われわれが悟性のうちでの観念の連結と呼ぶものは、単に、自然における諸現象の併存の記憶に他ならず、また、われわれが悟性のうちでの照応と呼ぶものも、自然における諸結果の連鎖あるいは継起の記憶に他ならないということである。

第二に、全ての悟性の働きは、記号あるいは音の記憶にか、それとも、形と図柄の想像か記憶にかに帰着せしめうるということである。

しかしまた、幸福であるためには、良き精神を享受するだけではなお不充分なのであって、さらに健全な身体を持つことが必要である。ここにロックをして、悟性論を公刊した後に、教育論を書くことを決心させた理由があった。

ロックは子供をその生れた時点で把えている。しかし、私には、彼はもう少し溯ることが必要だったように思われる。ではどこまでかといえば、人間の産出を規定する規則というものがありうるのではなかろうか。自分の庭の樹が繁茂することを望む人は、季節を選び、土壌を整え、多くの予防措置を講ずるが、それらのことは大方、樹よりもずっと重要な自然物にもあてはまるものと思われる。私は、父親と母親が健全で、彼等が満足していて、晴朗な気分であることを望むとともに、また、彼等が子供に生を与えようとする時は、自分たちの生に最も満足を覚えている時であってほしいと思うのである。もし妊娠した婦人の日々が苦渋で満されるとするならば、その胎内で芽生え、生長する柔らかな若木にも影響なしにすむということはありえないであろう。もしあなた方が自分の庭に若木を植えた場合には、日に一度だけそれを激しくゆすぶってみるがいい。そうすればその木にどんなことが起るかが分るだろう。それ故、妊娠中の婦人というものは、その夫にとっても、周りの人々にとっても神聖な存在であって欲しいものである。[19]

その婦人がその果実を生み出すに至ったときにも、その子に着せすぎもせず、また着せなすぎもしないようにしよ

う。そして、彼を何もかぶらず歩くことに馴れさせて、裸足でも平気でいるようにしよう。その子を簡単な、普通の食料で育てることにしよう。その眠りを短かくして、そのいのちを長くするようにしよう。その注意と感受性を全てのものに向けさせて、その生活を豊かにしてやろう。不時の蹉跌にも平気であるようにして、偶然に対する抵抗力を身につけさせるようにしよう。さらに、その子を理性という権威以外には服従させないようにして、偏見に対して具えさせるようにしよう。またもし、あなたがたが彼の心の中に、秩序についての一般的な観念をしっかりと固めうるならば、彼は善を愛好するようになるだろうし、またもし、彼の心中に、恥についての一般的な観念をしっかりと固めうるならば、彼は悪を恐れるようになるだろう。もし、あなたがたが彼の最初の視線を偉大な事物へと引きつけることができるならば、彼は高貴な魂を持つことになるであろう。もし、彼が単純で高貴な趣味を持つことを望むのであるならば、彼を自然の景観に馴れさせるようにするとよい。自然は常に高貴かつ単純だからである。健気な行為の物語に親たちの涙が流されるのを見たことがないとすれば、それは子供たちにとって不幸である。また、他人の悲惨な様に親たちの涙が流されるのを見たことがないとすれば、それも子供らにとって不幸である。寓話では、デューカリオンとピラは自分たちの背後に小石を投げて、人々をふたたび繁殖させたといわれている。もっとも感じやすい魂のうちには、その最初の源から受け継いだ一つの分子（モレキュール）が残っているのであって、そのものを認識して、柔軟にするように努めねばならない。

すでにロックが、その人間悟性論のうちで、物質が思考するということは何ら不可能だと思わないと言っていた。[20] 臆病な人々はこのような断定に恐れをいだくだろう。だが、物質が思考しようとしまいと、どちらでもよいとはいえないだろう。このことは、正義と不正とに、また霊魂の不滅や、政治上の、あるいは、宗教上の全ての体系的真理に対しても、どんな影響を及ぼすものであるのだろうか。

もし、感性が思考の最初の萌芽であるとしても、またもし、それが物質の一般的性質であるとしたところで、さら

にはまた、自然の全ての産物の間に不均等に配分されているために、その組織の多様さに応ずる大小のエネルギーをもってこの感性が働くものであるとしたところで、そこからどんな憂うべき結論が引き出されうるというのだろうか。そのような恨れは全くないのである。人間は常に現にある通りのものでありつづけるであろうし、その持てる諸能力の良きあるいは悪しき使用によって裁かれることになるであろう。

註

(1) この項は、*Encyclopédie, 3e édition*, いわゆる *Pellet* 版の、本文三六巻、図版三巻からなる、北大・文学部辞書資料室所蔵のものの、第二〇巻、二二六～二二九頁に収められている部分の全訳である。この項をとくに選んだ主たる理由は、それが、ディドロの執筆になるもので、哲学史関係のうちの主要な項目であることによるが、同時に、そこに述べられている内容そのものにもその理由の一部がある。『百科全書』の第一に訳出すべき項目は、恐らくダランベールの『序論』であろう。しかし、この部分については既にいくつかの訳が試みられ、また現に企画されている。(例えば、河出書房、『世界の名著』シリーズの第二九巻としてなど。)

ここでは、デカルトとならんで、『百科全書』の哲学思想に極めて多くの影響を持ったと思われるロックそのものを、『百科全書』がどのように把えているかを明らかにするという意味で、この項を選ぶことにした。『デカルト哲学』の項は、クールテペ神父が分担しており、その叙述はやや冗長であるとともに、内容的にも興味が薄い。その終りに附け加えられたダランベールの執筆の部分をとってみても、ここでのロックについての叙述にくらべて重要さの度合は低いものに思われる。*R. Desné* が作った、アンソロジー、*Les matérialistes français de 1750 à 1800.* (*Éditions de Buchet/Chastel, Paris, 1965.*) でも、このロックの項の後半の部分が他の重要項目の部分とならんで抜き出されている。(*pp. 178～.*)

ここでのディドロによるロックのとらえ方は、たとえば、リヴォーや、ブレイエや、さらには、バートランド・ラッセルの哲学史などに描かれている、普通のロックの像と比べて、著しい差違を示している。そして、また、本文でもふれておいたように、ここでディドロがロックの思想としてとらえ、展開している諸思想が、通常ディドロその人の思想の重要な特徴として指摘されている点と重なり合っていることも、われわれの注意を惹くのである。ここに述べられているディドロのロック観、そのロックの読み方が正しいものかどうかにはここでは立ち入ることができない。これらの点については、ディドロがなにを通じてロックの思想を知ったのか、

直接にロックのテクストそのものを通じてか、あるいは、他のたとえばコストによる仏訳のテクストを通じてかなどをも、全体的な調査の中で決定することが必要になってくる。ここではむしろ、ディドロの、従ってまた、『百科全書』に見られるロック像というものには、通常のそれと比べてかなりの偏向があると思われること、にもかかわらず、このように見られたロックというものが、ディドロと、また同時に『百科全書』とに大きな影響を及ぼしているという事実を明らかにすれば足りる。

(2) ロックがデカルトの何を読んだかは分らない。しかし、彼がオックスフォードのクライスト・チャーチ・カレッジで受けていた教育は、主としてスコラ哲学、それもオッカム風のそれであったといわれ、彼がそこで得た友人ボイルに影響されて、スコラの手のこんだ論議を一擲したデカルトの簡明な方法に魅力を感ずるようになった理由はよく分る。*cf. Rivaud; Histoire de la philos., t. III, p.p. 385~7 etc.*

周知のようにロックは、デカルトの生得観念説に対立したのだが、にもかかわらず、通常の、ホッブスとヒュームの橋渡し役としてのロックという系譜の他に、ベイコン―デカルト―ロックというもう一つの系譜も考えてみることができる。そして、この系譜を、ロックのあと引きつぐものをバークリーではなくて、コンディアックと考えてみれば、ディドロに至る一つの線をかなりはっきりと思い浮べることができるだろう。

(3) 一六六五年の旅行をさす。

(4) このシャフツベリー伯一世 (*the 1st Earl of Shaftesbury*)――ロックを受け継ぐ道徳哲学者として有名なシャフツベリー伯三世の祖父に当る――とロックとの交友関係は、一六六六年にはじまり、友人として、また侍医としての関係が、七五年の伯の死までつづいた。

(5) 有名なロックの『人間悟性論』は一六七一年から書きはじめられ、九〇年に至ってようやく完成した。

(6) この亡命は一六八三年末とされている。

(7) この帰国は一六八九年とされている。

(8) 一七〇〇年のこととされている。カッドワースの娘であった、マーシャム伯夫人の縁でロックはそこに寄寓した。

(9) 一六六〇年の手稿、"*Treatise on the Civil Magistrate*", をさすものか、一六九〇年に匿名で出た、"*Two Treaties of Government*" をさすものかはここでは分らなかった。後者にロックの政治哲学の中核が含まれている。それは二つの部分を含み、ロバート・フイルマーの "*De patriarcha*" への反論を主とする第一論文と、ホッブスの政治思想に対する批判を含む第二論文から成っていて、その中でロックは、オレンヂ公・ウイリアムの立憲制を基礎づけるとともに、スチュアート朝の支持者たちに対しても、また共

和制の支持者たちに対しても反対したとされている。(*cf. Russell; History of Western Philos., Chap. XIV, Locke's political philos., pp. 642~7, Rivaud; loc. cit., p.p. 398~9,* および、ソ・アカデミー版、世界哲学史、第二巻、四八一頁など。)

(10) *"Some Thoughts concerning Education", 1693* をさす。

(11) *"Epistola ad Tolerantia", 1689,* およびその英訳 *1689, "A Second Letter", 1690, "A third Letter", 1692, "A Fourth Letter", 1706.*

(12) *"Some Considerations of the Consequences of the Lowing of Interest, and Raising of the Value of Money", 1691~2, "Futher Considerations concerning Raising the Value of Money", 1695.*

(13) *"The Reasonableness of Christianity as delivered in the Scriptures", 1695.* 基本的には理神論の線に近く、従ってまた、その寛容の態度も、無神論者とカトリック（つまり、共和主義者とスチュアート朝の支持者）とに対しては制限を加えたロックの宗教上の立場は、マルクスが、その『ルイ・ボナパルトのブリュメール一八日』で指摘しているように、結局、当時のイギリス・ブルジョアジーの態度の理論的表現に他ならなかった。ロックが、そこで述べている思想は、根本的には、『百科全書』の、デイドロ執筆の『キリスト教』の項に示される立場と違わないが、ただ名誉革命を通り過ぎたイギリスと、これからブルジョア革命を迎えるフランスとの相違がそこには見出されるのではなかろうか。この意味では、デイドロの『理性化されたキリスト教』の路線のうちには、むしろロックのそれを、ロック自身も望まなかったある方向に展開して行った、トーランドの *"Christianity not mysterious", 1696* の考え方に近いものが含まれていたと言えるかもしれない。（ソ・アカデミー・世界哲学史、第二巻、四八〇～四八三頁など。また、*Rivaud; loc. cit., t. III, p.p. 399~ 401, cf.*)

なお、本文のうちでも触れておいたのだが、デイドロとトーランドとの間に推定される親近性についていえば、当時の唯物論者たちの主要な仕事は宗教批判であって、その限りでは彼らは何よりも先ず無神論者に他ならない。唯物論はさしあたり無神論として機能したのである。しかし、他方、またトーランドやデイドロのみならずジャン・メリエでさえも、その宗教批判の根底にはある種の自然哲学があった。メリエの場合にはその自然観はなおデカルト的であるが、トーランドとデイドロがその宗教批判を徹底して行いえたのは、デカルト流の機械論的自然と唯心論的精神という二元論を克服した、スピノザの思想のおかげである。ベールがはっきり指摘しているように、この時期前後の全ての無神論者の背後にはスピノザ哲学があるのである。スピノザの、『神学政治論』での聖書研究にはじまって、トーランド、デイドロらに至るある宗教批判の形式があり、これとベールらの懐疑論的な形での宗教批判との合流が、『百科全書』の宗教批判の骨組みをなしている。ただ、『エチカ』を中心とするスピノザの形而上学が、単に無神論にのみ帰着

しきれない宗教的性格を含んでいることは、その形而上学の構想の萌芽を示している『短論文』のうちにもはっきりと示されている。(この点については、北大・教養部、人文科学論集3所収の拙稿など参照。)また、『百科全書』における宗教批判については、ベイルの巨大な影響を低く見積ることも正しくないだろう。ディドロとスピノザ主義との関係は彼の思想の全体を覆うものとはなりえないであろう。

(14) 『百科全書』の哲学史関係の項目では、その思想家の生涯にかなりの頁数を費す場合が多い。たとえば、『ボップス哲学』、『ニュートンの哲学』、『ガリレイの哲学』などの場合にも、同様の形式がとられている。この点では、『百科全書』はその後の類似の辞典と同じ形式をとっているわけである。

(15) ロックの『人間悟性論』の第一巻は、主としてデカルトの生得観念説への反駁に当てられていたというだろう。しかし、ロックが認識の出発点として選んだ『直覚的認識』というものの性格は、デカルトの明証的直観に極めて近いものだった。必ずしも判明には示されていないこのことの真の意味は、その第四巻に至ってはじめて明らかとなってくる。

(16) ロックが、『直覚的認識』(*Intuition*)や、数学などの『論証的認識』(*Demontration*)に比して、『感覚』(*Sensation*)にあまり重要でない役割を振り当てていたことはよく知られている。外的対象についての認識も、ロックでは、不充全な(*inadequate*)な認識であったにすぎないから、(ロックの『実体』についてのひかえめな論議を想起せよ)、ディドロがここで、これらの点について、ロックに対する不満をもらしているのもいわば当然のことであったといえよう。

(17) ロックにとっては、諸学は三つのグループに分類され、自然哲学と実践的な学、および、知識の手続的、技術的側面を扱う、記号と言葉に関する学がみとめられている。この各々は伝統的な、*physikē, praktikē, logikē* または *semeiotikē* に対応するものであるが、その内容は必ずしもはっきりしない。『言葉』の研究には主として、第三巻が当てられている。

(18) 観念の起源と本性は、主として『人間悟性論』第二巻のテーマと見なしうるが、そこでのロックの考え方は、外的感覚のみに由来しない、思惟、意志等々の観念を認めるものであって、この点に、コンディアックの感覚論を継承しているディドロの不満が述べられたのは当然である。ここで述べているディドロの構想も、コンディアックの『感覚論』でのそれをうけているものということができるだろう。物体の『第一性質』と『第二性質』を区別するロックの考え方は、いずれは乗り越えらるべき、ロック哲学の欠陥なのであって、ただ、その乗り越えの方向にバークリーとコンディアックとの二つがあるわけである。この意味では、コンディアックやディドロもまた、ロックの立場の徹底であるといえる。

(19) これらの論議のうちには、ディドロの思惟の特徴である日常性と、生理学主義的傾向を見てとることも可能であろう。

(20) ロックは思惟能力を人間に個有のものと認め、言語や記号を要する反省的思惟を動物と人間を分つ一つの目じるしとさえ考えている。従って動物にも記憶などの能力は認められているが、植物は一切の表象作用を拒まれている。従って、デイドロがここに述べるような理解をロックのどこから得たのかは、にわかには推定が不可能である。とにかく、デイドロが、このような考えをロックのうちに読みこんでいることは興味がある。

資料 II

『百科全書』主要項目一覧表

(1) 項目の選定に当って,

a. 桑原武夫編『フランス百科全書の研究』(*1954*) の巻末の『重要項目一覧』, および,

b. A. Soboul; *Textes choisis de l'Encyclopédie.* (*Edition Sociales, 1962*)

c. *J. Voilquin*; *L'Encyclopédie.* (*Extraits*) (*Classiques* Larousse, *1934*)

d. *A. Pons*; *Encyclopédie.* (*Edition de* "J'ai lu *l'essentiel*" *1963*)

e. J. Varloot; *Diderot, Textes choisis, t. II* (*Edition Sociales, 1953*)

などに挙げられている諸項目を参考としたが, そのいずれにも長短があり, またとくに哲学関係のものについては不備を感ずるものも多かったので, もとのテクスト自体に当って, 独自のリストを作成することにした.

上記のうち, 桑原氏編のものは事の性質上, 最も多数の項目を収めているが, なぜか, 哲学関係の主要項目のうちのいくつかが落ちているのが目についた.

Classiques Larousse のそれは, わずか *82* 頁の小冊子のうちに, *d'Alembert* の有名な『序論』の全文を収めている関係上, 他の項目はそえものの感を免れえないが, しかし選ばれている項目はいずれも重要なものばかりである.

A. Pons のそれは, 約 *450* 頁にわたり, 上記の抜萃集のうちでは, 最も多くの項目を収めているが, その選択の基準が必ずしも明らかでなく, また最重要項目と思われるもののうちのいくつかが欠けている.

内容的に見て最も充実しているのは *A. Soboul* によるもので, そこには一貫した基準と, 深い研究に根ざした, 最重要項目の指摘があるように感ぜられる.

J. Varloot によるテクストは，*Diderot* の執筆にかかる項目のみを，しかも，他のテクストの後に，ごく一部を挙げているに止るため，はじめからその選択には大きな制限が課せられていた．しかしその限りでは，そこに挙げられているわずか *17* 項目は，ほぼ妥当なものということができよう．

なお，*b*, *c*, *d*, *e* の各テクスト集には，その時期の研究の方向と水準とを示す，いずれも注目するに足る重要な序文が附け加えられており，とくに，*Soboul* の短いそれは，重要な観点を含むものとして注目される．(本文参照)

(2) このリストの作成に当り使用した原著は，北海道大学・文学部・辞書資料室所蔵のもので，四つ折版の，各々本文 *36* 巻，図版 (*Planches*) *3* 巻，計 *39* 巻から成っている，いわゆる *Pellet* 版，第 *3* 版である．その正式の呼称は

"*Encyclopédie ou Dictionnaire raisonné des sciences, des arts et des métiers, par une Société de Gens de Lettres, mis en ordre et publié par M. Diderot; quant à la partie Mathématique, par M. D'Alembert.—Troisième édition—A Genève, chez Jean-Léonard Pellet, Imprimeur de la République,—A Neufchatel, chez la Société Typographique.—M. DCC. LXXVIII.*" となっている．(なお，全 *39* 巻中，*1778* 年中に第 *1* 巻～*13* 巻が，次の *79* 年中に残りの第 *14* 巻～*39* 巻が刊行されている．)

この版を，他の版，とくに，初版 (*Textes original*), *Paris, chez Briasson, 1751～1780, 35 vols., in folio.* および，その第二版 (*Deuxième édition*) *1758～1771, 28 vols., in folio.* と比較すれば，

Nouvelle édition, Genève, Pellet, 1778～1781, 45 vols., in quarto. および，*Edition de Lauet, Berne, chez les Sociétés Typographiques, 1780～1782, 45 vols., in quarto.* により近く，初版の本文 *17* 巻，図版 *11* 巻 (*1772* 年までに完了)，および，*Marmontel* の手になる補巻 (*Supplément*) *4* 巻 (*1776～77*)，図巻 *4* 巻 (*1780*)，索引 (*Tables*) *2* 巻 (*1780*) という数字を考慮に入れるとき，とくに図版の圧縮されているのが目立った特徴といえる．なぜ図版をとくに *3* 巻のみに圧縮したかについては，図版の第 *3* 巻目，全体の *39* 巻目の巻頭の *Avertissement* で，編者はその主たる理由を，本文と重複した部

分を省いたためだと述べているが，恐らく，図版そのものも大幅に削られているものと推定され，この図版の部分を初版と同じ，あるいは，それに近い形にすれば，全 *39* 巻という数字は *45* 巻に近いものとなったにちがいない．それ故，本文の部分だけをとれば，北大の版は他の第三版と極めて近いものだったと思われる．とにかく，初版そのもの，とくにその図版の部分の現物を見ることができなかったので，北大の版および，他の研究書の敍述などから上記のように推定しうるのみである．

なお，北大所蔵の版の図巻では，その第 *1* 巻は *Sciences mathématiques* 関係の図版を中心とし，第 *2* 巻は全体が *Anatomie* の図版に当てられ，第 *3* 巻は，*Mathématique, Algèbre, Méchanique, Optique, Astronomie, Physique* などに関するごく少数の図版と，*Musique, Architecture* 関係の図版からなり，各々の図版には，それに先立って簡単な説明文もつけ加えられている．本文中には，いくつかの表はあるが，図版は殆んどなく，ただ *36* 巻の巻末に *Horloge* の説明図が見られるのみである．

(*3*) 以下のリストでは，左から

イ．原項目名

ロ．その訳名

ハ．北大・文学部所蔵の第 *3* 版の巻数，および頁数

が示されており

ニ．備考欄の○印は，それぞれ，それが該当する記号，桑，*S, L, J, V, AT* によって指示されるテクストの中に，その項目の一部または全部が載せられていることを示している．

ホ．桑，*S, L, J, V* は，それぞれ上記の (*1*) で示しておいた，*a, b, c, d, e* の下線を施した部の略号であり，それぞれ，各テクストを指示するものである．

ヘ．*AT* なる記号は，Assézat-Tourneux 版の *Œuvres complètes de Diderot, 20 vols., 1875～77.* を指し，該当する○印はその，*t. XIII* (*A～B*), *t. XIV* (*C～E*), *t. XV* (*F～L*), *t. XVI* (*L～Q*), *t. XVII* (*R～Z*) に収められている項目であることを示す．これらについては，*J. Proust*; *Diderot et L'Encyclopédie* による決

定的な考証があり，この全集に載っているということは，それが極めてわずかの例外を除いて，*Diderot* その人の執筆した項目であることを意味するものである．

Encyclopédie の原テキストでは，*Diderot* の執筆項目は，* 印（星標）によって指示され，またしばしば，全く執筆者の署名等のないもので彼の書いたものもある．なお，*Diderot* についで多くの重要項目を分担した *d' Alembert* の執筆項目は (*O*) なる記号で，その項目の末尾に指示され，*Jaucourt* の場合には，執筆項目の末尾に，それが *l'article du Chevalier de Jaucourt* であることが明瞭に示されていることが多く，また，(*D. J.*) の記号で指示されている場合もある．他の執筆者の場合にも，*d'Alembert* のようにあらかじめ定められた記号でか，あるいは署名入りで，その執筆項目が明らかになっている．無印，無署名のものの多くは，極めて短いものか，または *Christianisme* などの項のように，弾圧に対する配慮によるものと考えられる項目かである．

ト．*S, J, L, V* に収められている項目の多くは，当該項目中の編者が重要と考えた一部分のみである．項目の全文が載っている場合は稀れである．(執筆の分担については，*Discours préliminaire, t. 1, p.p. lxxiij*～，および，*t. 1* および *t. 7* の巻頭の *Marques des Auteurs* によってほぼ判明するようになっているが，一部は後の研究によって明らかとなって来ている)．

原項目名	同訳名	第3版, 巻数	頁数	桑	S	J	L	V	AT
Discours préliminaire des éditeurs (d'Alembert)	編集者の序論	1	*i ~lxxxj*		○		○		
Absolu	絶対	1	*167~ 8*	○					
Abstraction	抽象	1	*179~ 88*						
Action (morale)	行為	1	*458~ 61*	○					
Agriculture	農業	1	*659~ 88*	○					○
Algèbre	代数学	2	*86~ 92*	○					
Allemagne (Allemands)	ドイツ (ドイツ人)	2	*169~ 79*	○					○
Ame	霊魂	2	*294~340*	○					
Amour propre	自愛心	2	*407~ 19*	○					○
Analogie	類推	2	*479~ 83*	○					
Analyse	分析	2	*485~ 8*	○					
Anatomie	解剖学 (同	2	*511~ 58*	○					
	図表と解説)	2	*558~ 94*						
Angleterre	イギリス	2	*657~ 8*	○					
Animal	動物	2	*671~ 84*	○					
Application d'une science à l'autre	科学の応用	3	*66~ 71*	○					
Architecture	建築	3	*252~ 61*	○					
Argent	銀	3	*295~306*	○			○		○

Aristotélisme	アリストテレス哲学	**3**	*334～ 68*							
Arithmétique	算　数	**3**	*369～ 88*							
Art	技　術	**3**	*474～ 81*	○	○	○		○	○	
Art (Beaux-arts)	芸　術	**3**	*481～503*	○						
Association d'idées	観念連合	**3**	*698～ 9*	○						
Astre	星	**3**	*715～ 30*							
Astronomie	天文学	**3**	*740～ 62*							
(1) *Astrologie*	占星術	**3**	*735～ 40*	○						
Athée, Athéisme	無神論（者）	**3**	*777～829*	○			○			
Atomisme	アトム論	**3**	*855～ 6*		○	○				
Attention	注　意	**3**	*895～ 9*	○						○
Augustin, Augustinien	アウグスティヌス，の	**4**	*51～ 3*							
Automate	自動機械	**4**	*116～ 8*							
(2) *Autorité politique*	政治的権威	**4**	*120～ 5*	○		○	○	○	○	
Axiome	公　理	**4**	*139～ 44*							
Baconisme	ベイコン哲学	**4**	*191～ 3*	○						
Beau	美	**4**	*608～ 36*	○						○
Bible	バイブル	**5**	*7～ 15*	○						○
Bien	善	**5**	*42～ 5*	○						○

原項目名	同訳名	第3版, 巻数, 頁数		桑	S	J	L	V	AT
Bon	善	**5**	*250～ 5*	○					
Bonheur	幸福	**5**	*260～ 2*	○	○	○			○
Bourg, Bourgeois	ブルジョア	**5**	*390～ 1*	○					○
Caffé	コーヒー	**5**	*749～ 53*	○					
Calvinisme	カルビン主義	**5**	*883～ 4*	○					
Campanella	カンパネルラ	**6**	*44～ 7*						
Canal	運河	**6**	*95～114*						
Canon	法典	**6**	*151～ 60*	○					○
Caractère	性格	**6**	*263～ 66* &*286～98*	○					
Cartésianisme	デカルト哲学	**6**	*409～ 27*						
Catégorie	カテゴリー	**6**	*540～ 1*	○					
Catholicité	カトリック性	**6**	*545～ 6*	○					
Cause	原因	**6**	*568～ 75*	○					
Certitude	確実性	**6**	*712～ 41*	○					○
Chaldéens (Philos. de)	カルデア人(の哲学)	**6**	*779～804*	○					○
Chaleur	熱	**7**	*1～ 31*	○					○

Change, (—ment)	変　化	**7**	*215～ 25*						○
Chanson	シャンソン	**7**	*237～ 42*	○					
Charbon	炭　素	**7**	*293～307*	○					
Charge	官職（含図表）	**7**	*322～ 83*	○					○
Charles IV	シャルル４世	**7**	*399～411*	○					
(3) *Christianisme*	キリスト教	**7**	*831～ 40*	○					○
Chimie	化　学	**8**	*12～ 63*	○					
Cité	都　市	**8**	*172～ 4*	○					○
Citoyen	市　民	**8**	*181～ 3*	○		○		○	○
Collège	学　院	**8**	*490～500*	○					
Comédie	喜　劇	**8**	*560～ 80*	○					
Commète	彗　星	**8**	*581～ 97*						
Commerce	商　業	**8**	*919～ 34*	○		○			
Communauté	共同体	**8**	*671～ 7*	○					
Commune	地域団体，共同権，下院	**8**	*682～ 6*	○					
Conception	概　念	**8**	*799～ 80*	○					
(4) *Connoissance*	認　識	**8**	*964～ 79*	○					
Conscience	意識（良心）	**9**	*14～ 18*	○		○			
Constitution	憲　法	**9**	*150～ 66*						
Construction	構　造	**9**	*167～213*						

原項目名	同訳名	第3版, 巻数, 頁数		桑	S	J	L	V	AT
Contemplation	冥想	9	233～ 4						
Continuité	連続性	9	242～ 4						
Contradiction	矛盾	9	247～ 8	○					○
Copernique (Système de)	コペルニクス(の体系)	9	372～ 5						
Corps	物体	9	514～ 8	○					
Corps (humain)	身体	9	520～ 7	○					
Corpusculaire	粒子的	9	537～ 40		○				
Cosmologie	宇宙論	9	593～600						
Courbe	曲線	9	757～ 77						
Création	創造	9	865～ 75	○					
Crime	犯罪	9	916～ 22	○					
(5) *Critique*	批判	10	1～ 22	○	○	○			
Découverte	発見	10	456～ 8	○					
Déduction	演繹	10	502～ 3	○					
Définition	定義	10	533～ 40	○					
Déisme, (Deistes)	理神論(者)	10	586～ 8	○					
Démocratie	デモクラシー	10	667～ 71	○		○			
Démonstration	証明	10	679～ 81	○					
(6) *Désir*	欲求	10	817～817	○					
Dialectique	弁証法	10	910～ 3	○					

	Dictionaire	辞　典	**10**	*963～ 83*	○					
	Dieu, Dieux	神，神々	**10**	*996～1011*	○					○
	Droit	法	**11**	*385～ 99*						
	Droit civil	民　法	**11**	*399～401*	○					
	Droit françois	フランス法	**11**	*402～ 9*	○					
	Droit privé	私　法	**11**	*415～ 20*					○	○
	Droit naturel	自然権	**11**	*424～ 9*	○					
(7)	*Dynamique*	動力学	**11**	*507～ 9*	○		○			
	Eau	水	**11**	*528～ 62*						
(8)	*Eclectisme*	折衷主義	**11**	*670～712*	○	○	○		○	○
	Eclipse	食	**11**	*712～ 40*						
(9)	*Ecôle* (*Philos. de*)	学院哲学	**11**	*749～ 50*						
(10)	*Economie*	経　済	**11**	*807～ 28*	○	○	○			
	Education	教　育	**11**	*929～ 40*			○			
	Editeur	編集者	11	*917～ 8*		○				
	Effet	結　果	**11**	*946～ 7*	○					
	Egalité naturelle	自然的平等	**11**	*962～ 4*						
	Eglise	教　会	**11**	*975～ 85*	○					
	Egoisme	エゴイスム	**11**	*996～ 7*	○	○	○			
	Egyptiens (*Philos. de*)	エジプト人(の哲学)	**11**	*1004～ 12*	○					○
	Elasticité (*Elastique*)	弾　性	**11**	*1022～ 31*	○					

原　項　目　名	同訳名	第3版, 巻数, 頁数		桑	S	J	L	V	AT
Eléatique	エレア派	**12**	*6～ 14*					○	○
(11) *Election*	選　挙	**12**	*17～ 42*						
Electricité	電　気	**12**	*43～ 59*	○					
Elémens des sciences	諸科学の原理	**12**	*86～ 98*	○					
Empirique, Empirisme	経験的, 経験論	**12**	*276～ 80*						
(12) *Encyclopédie*	百科全書	**12**	*361～410*	○	○	○		○	○
Ennui	倦　怠	**12**	*492～ 4*	○					
Entendement	悟　性	**12**	*537～ 8*	○					
Epicuréisme (—risme)	エピクロス哲学	**12**	*662～ 72*						○
Equation	方程式	**12**	*786～836*						
Erreur	誤　謬	**12**	*945～ 6*	○		○			
Esclavage	隷　属	**12**	*990～ 9*	○					
Espace	空　間	**12**	*1107～ 22*	○					
Espèce	種	**13**	*1～ 33*	○		○			
Esprit	精　神	**13**	*36～ 41*	○					
Essence	本　質	**13**	*78～ 9*						
(13) *Esthétique*	美　学	**13**	*90～ 2*	○					
Etats	国　家	**13**	*154～ 66*	○	○				

	Etat de nature	自然状態	**13**	*147～ 51*	○					
	Ether	エーテル	**13**	*210～ 4*						
	Ethiopiens (Philos. de)	エチオピア人（の哲学）	**13**	*217～ 9*		○	○			○
	Evangéliste	福音主義者	**13**	*350～ 60*	○					
	Evidence	明　証	**13**	*411～ 31*	○					
	Excommunication	破　門	**13**	*481～ 91*	○					
	Existence	存　在	**13**	*559～ 71*	○					
	Expérience	経　験	**13**	*625～ 6*	○					
	Experimental	実験的	**13**	*626～ 33*	○		○			
	Faculté	能　力	**13**	*767～ 84*	○					
	Fait	事　実	**13**	*807～ 9*	○		○			○
	Eamille	家　族	**13**	*822～ 5*	○					
	Fanatisme	狂　信	**13**	*826*	○	○				○
	Femme	女　性	**13**	*949～ 64*	○					
	Fer	鉄	**13**	*994～1003*						
	Ferme	小作地	**14**	*6～ 17*	○					
(14)	*Fermiers*	小作農	**14**	*37～ 58*	○	○	○			
	Feu	火	**14**	*162～ 85*	○					
	Finance	財　政	**14**	*519～ 24*	○		○			
	Fluides	液　体	**14**	*648～ 65*						

原　項　目　名	同訳名	第3版, 巻数, 頁数	桑	S	J	L	V	AT
Foi	信　仰	**14** *767～ 97*	○					
Foible (—esse)	弱い (—さ)	**14** *803～ 16*	○					○
Force	力	**14** *958～ 84*	○					
France	フランス	**14** *320～ 3*	○		○	○		
François ou Français	フランス人	**15** *338～ 57*	○		○	○		
Futur	未　来	**15** *603～ 9*						
Galilée (Philos. de)	ガリレイ (の哲学)	**15** *691～ 8*						
Gazette	新　聞	**15** *869～ 71*	○					
Génération	世　代	**15** *918～ 47*	○		○		○	○
(15) *Genève*	ジュネーヴ	**15** *959～ 67*	○		○			
Génie	天　才	**15** *976～ 83*	○					
Géographie	地　理	**15** *5～ 36*	○					
Géométrie	幾何学	**16** *42～ 57*						
Gourmandise	美　食	**16** *325～ 6*	○					
Goût	趣　味	**16** *332～ 57*	○					
Gouvernement	政　府	**16** *388～ 94*	○		○			
Grains	穀　物	**16** *433～ 68*		○	○			
Gravitation	重　力	**16** *545～ 56*	○					

	Grecs (Philos. de)	ギリシャ人(の哲学)	**16**	*575～ 88*						○
	Guerre	戦　争	**16**	*757～808*		○	○			
	Haine	憎しみ	**16**	*907*	○					○
	Harmonie	調　和	**17**	*74～ 85*	○					○
	Harmonie préétablie	予定調和	**17**	*85～ 7*						
	Héros	英　雄	**17**	*396～403*	○					
	Heureux	幸福な	**17**	*427～ 9*	○		○			
	Hiérarchie	階　層	**17**	*443～ 6*	○					○
(16)	*Histoire*	歴　史	**17**	*576～ 85*	○		○	○		
	Histoire naturelle	自然史	**17**	*585～ 93*	○					
	Hobbisme	ホッブス哲学	**17**	*597～612*	○	○	○			○
	Homme	人　間	**17**	*668～707*	○	○				○
	Honneur	名　誉	**17**	*722～ 7*	○					
	Humain (Espèce)	人　類	**17**	*840～ 5*	○	○	○			
	Hypothèse (—tique)	仮設 (的)	**17**	*994～1001*	○					
	Idéal	理　想	**18**	*152～ 61*	○					
	Idée	観　念	**18**	*161～ 70*	○					
	Identité	同一性	**18**	*171～ 4*	○					
	Imagination	想像力	**18**	*371～ 7*	○					○

原　項　目　名	同訳名	第3版, 巻数, 頁数		桑	S	J	L	V	AT
Immatérialisme (ou Spiritualisme)	非唯物論（または唯心論）	18	391～ 9	○					○
Impôt	租　税	18	447～ 52	○	○	○			
Imprimerie	印刷所	18	458～ 86						
Indifférence	無　記	18	604～ 5	○					○
Indigent	貧乏人	18	605		○	○			○
Induction	帰　納	18	634～ 9	○					○
Industrie	産　業	18	647～ 9	○	○	○			
Infaillibilité	無謬性	18	651～ 2	○					
Infini (—té)	無限（性）	18	675～ 86						
Influence	影　響	18	727～ 8	○	○				
Intérêt	利　子	18	932～ 5	○					○
Insensibilité	無感動（ストアの）	18	828～ 9	○					○
Intolérance	不寛容	18	976～ 9	○		○			○
Intelligence	知性	18	889						○
Irreligieux	非宗教的	19	92	○					○
Jalousie	嫉　妬	18	44	○					○
Jansénisme	ジャンセニスム	18	60～ 3	○					○

Japon	日　本	**18**	*68～ 72*	○					
Japonais (Philos. de)	日本人（の哲学）	**18**	*72～ 7*						○
Jésuite	ジェジュイット	**18**	*258～ 65*	○		○			○
Jésus-Christ	イエス・キリスト	**18**	*265～ 73*	○					○
Journal	新聞	**19**	*57～ 68*		○	○			○
Laine (Manufacture en Laine)	羊毛（製造）	**19**	*445～ 58*	○					
Langue	言　語	**19**	*559～ 88*						
Lecteur	読　者	**19**	*727～ 9*	○					
Législateur	立法者	**19**	*769～ 79*	○		○	○		○
Leibnitzianisme	ライプニッツ哲学	**19**	*790～807*						○
Lettres	文　字	**19**	*873～ 9*						
Liberté (morale)	自由（道徳的）	**19**	*979～ 96*	○	○				○
civile	市民的自由	**19**	*996～ 7*	○		○			○
naturelle	自然的自由	**19**	*996*	○		○			○
politique	政治的自由	**19**	*997*	○					
de penser	思想の自由	**19**	*997～1000*						
Littérature	文　学	**20**	*164～ 5*	○					

原項目名	同訳名	第3版, 巻数, 頁数		桑	S	J	L	V	AT
Locke	ロック	**20**	*226～ 9*						○
Logique	論理学	**20**	*252～ 9*	○					○
Loi	法	**20**	*269～ 73*	○					
Loi fondamental	基本法	**20**	*292*	○		○			
Loi naturelle	自然法	**20**	*300～ 2*	○					○
Lumière	光	**20**	*455～ 66*						
Lune	月	**20**	*471～501*						
Luxe	奢侈	**20**	*544～ 58*	○					○
Machiavélisme	マキアヴェリスム	**20**	*616～ 7*	○		○			
Machine	機械	**20**	*619～ 30*						
Magie (*—cien*)	魔術(士)	**20**	*706～ 12*	○					
Magnétisque (*—tisme*)	磁気	**20**	*723～ 41*						
Mal	悪	**20**	*851～ 6*						
Maladie	病気	**20**	*874～ 89*						
Malebranchisme	マールブランシュ哲学	**20**	*899～901*						○
Malheur	不幸	**20**	*904～ 5*	○					
Manichéisme	マニ教	**20**	*964～ 80*						○
(17) *Manufacture*	マニュファクチャー	**20**	*1031～ 5*	○	○	○			
Mariage	結婚	**21**	*74～102*	○					

	Matérialiste	唯物論者	**21**	*241*						
	Mathématique	数　学	**21**	*231～ 2*						
(18)	*Matière*	物　質	**21**	*244～ 50*	○					
	Méchanique	力　学	**21**	*332～ 9*	○					
	Médecine	医　学	**21**	*337～ 63*	○					○
	Méditation	冥　想	**21**	*415～ 6*	○					○
	Mégarique	メガラ学派	**21**	*425～ 8*						
	Mémoire	記　憶	**21**	*471～ 7*	○					
	Mendiant (—cité)	乞食 (生活)	**21**	*482～ 8*			○			
	Mer	海	**21**	*536～ 47*	○					
	Messie	メシア	**21**	*630～ 41*	○					
	Métal	金　属	**21**	*687～ 94*						
	Métallurgie	冶金学	**21**	*695～702*		○				
	Métaphyique	形而上学	**21**	*710*	○		○			
	Météore	気象学	**21**	*719～ 20*						
	Méthode	方　法	**21**	*721～ 49*	○					
(19)	*Métier*	手工業	**21**	*754～ 7*	○		○			
	Microscope (—copique)	顕微鏡 (的)	**21**	*828～ 36*						
	Ministre (d'état)	大　臣	**21**	*942～ 8*						
	Mœurs	習　慣	**22**	*45～ 59*	○	○	○			○

原　項　目　名	同訳名	第3版, 巻数, 頁数	桑	S	J	L	V	AT
Molinisme	モリナ主義	22 *91～ 2*						
Monarchie (absolue, limitée)	君主制(絶対, 制限)	22 *103～ 6*	○	○	○			
Monde	世　界	22 *111～ 2*						
Monnoie	貨　幣	22 *118～ 25*	○					
Morale (Moralité)	道　徳(性)	22 *234～ 43*	○					
Mort	死	22 *272～ 88*						
Mosaïque ou chrétien (Philos.)	モーゼのまたはキリスト教の(哲学)	22 *313～ 20*	○		○			○
Mouvement	運　動	22 *463～ 81*						
(20) *Musique*	音　楽	22 *601～ 12*	○					
Mystique	神秘思想	22 *649～ 50*	○					
Naître	出　生	22 *679～ 80*						
Nation	国　民	22 *747*		○	○			○
(21) *Nature*	自　然	22 *753～ 6*	○	○				
Naturel	自然の	22 *764～ 75*	○					
Nécessité	必然性	22 *819～ 20*						○
Newtonisme	ニュートン哲学	22 *947～ 52*	○					

Noblesse	貴　族	**23**	*7～ 33*	○					
Nombre	数	**23**	*75～ 80*						
Notaire	公証人	**23**	*128～ 53*						
Notion	概　念	**23**	*161～ 2*	○					
Nouveauté	新しさ	**23**	*185～ 6*	○					
Objet	対　象	**23**	*269*	○					
Observation (*—teur*)	観察（測）（者）	**23**	*287～313*						
Obligation	責　務	**23**	*271～ 5*	○					
Œconomie politique	経済学	**23**	*415～ 57*	○					
Œil	眼	**23**	*415～ 57*						
Œuvres	作　品	**23**	*533～ 4*	○					
Olympiade	オリンピック（附図表）	**23**	*618～ 36*						
Ombre	影	**23**	*660～ 84*						
Ontologie	存在論	**23**	*724～ 6*	○					○
Opéra	オペラ	**23**	*740～ 59*	○					
Opération	手　術	**23**	*759～ 68*	○					
Opression (*—sieur*)	抑圧（者）	**23**	*794～ 5*	○	○				○
Optimisme	オプティミスム	**23**	*796～ 7*	○					
Optique	光　学	**23**	*797～802*	○					

原　項　目　名	同訳名	第3版, 巻数, 頁数	桑	S	J	L	V	AT
Or	金	**23** *803～ 10*						
Ordonance	命　令	**23** *921～ 41*	○					
Ordre	秩　序	**23** *942～ 60*	○					
Organe	器　官	**24** *1～ 2*						
Organisation	組　織	**24** *2*	○					
Orphique	オルフィック教	**24** *61～ 7*						
Oscillation	振　動	**24** *97～ 9*	○					
Pair (de France)	廷　臣	**24** *271～ 89*						
Paix	平　和	**24** *293～ 6*	○	○		○		○
Pape	法　王	**24** *431～ 44*	○					
Papier	紙	**24** *475～ 98*	○					
Paradis (terrestre)	天国（地上の）	**24** *535～ 8*	○					
Parallélisme	併行論	**24** *567～ 73*						
(22) *Paris*	パ　リ	**24** *633～ 61*	○					
(23) *Parlement*	高等法院, 議会	**24** *668～786*	○					
Parménidéenne (Philos.)	パルメニデスの（哲学）	**24** *789*						○
Parole	言　葉	**24** *801～ 2*	○					○

Passage	軌　道	**24**	*873～ 85*							
Passions	情　念	**24**	*931～ 9*	○						○
Patrie	祖　国	**24**	*1000～ 3*	○	○	○				
Patriote (—tisme)	愛国者（心）	**24**	*1004～ 6*	○						
Peché	罪	**25**	*37～ 9*	○						
Peine	罰	**25**	*82～ 9*							○
Peinture, Peintre	絵　画（家）	**25**	*93～134*	○		○				
Pendule	振　子	**25**	*171～ 90*							
Pensée	思　想	**25**	*219～ 23*	○						
Pépin	ペパン	**25**	*241～ 70*							
Perception	知　覚	**25**	*276～ 9*							
Percussion	衝　突	**25**	*283～ 91*							
Père	父	**25**	*298～300*	○						
Père de l'église	教　文	**25**	*300～ 18*		○	○				
Perfection	完　全	**25**	*322～ 3*	○						○
(24) *Péripathéticienne*	ペリパトス学派の	**25**	*351～ 65*							○
Perpétuel	永久の	**25**	*407～ 9*	○						
Personne (—nalité)	人格（性）	**25**	*473～ 6*							
Perspective	展　望	**22**	*479～ 91*							
Pesenteur	重　さ	**25**	*503～ 12*							

原項目名	同訳名	第3版, 巻数, 頁数		桑	S	J	L	V	AT
Peste	ペスト	25	525～ 37						
Peuple	人民	25	572～ 4						
Phéniciens (Philos. de)	フェニキア人(の哲学)	25	625～ 6	○					○
Phénomène	現象	25	626～ 32						
(25) *Philosophe*	哲学者	25	667～ 70	○	○				○
Philosophie	哲学	25	670～ 8	○					○
Physico-mathématique	物理数学	25	736～ 7						
Physiologie	生理学	25	737～ 9	○					
Physique	物理学	25	740～ 2	○					
Pierres	石	25	806～ 40						
Pierre Précieuse	宝石	25	855～ 63						
Piété	敬虔さ	25	868～ 70						
Plaisir	快楽	26	59～ 64	○					○
Plan	平面	26	64～ 75						
Planète	惑星	26	85～ 99						
Platonisme	プラトン哲学	26	195～209	○					○
Poème	詩	26	326～ 80	○					
Poète	詩人	26	388～406	○					

	Point	点	**26**	*451～ 3*						
	Police	警　察	**26**	*547～ 62*	○					
	Politiqte	政治学	**26**	*579～ 87*			○			○
(26)	*Polythéisme*	多神論	**26**	*104*	○					○
	Population	人　口	**26**	*816～ 47*	○		○			○
	Port-Royal	ポール・ロワイアール	**26**	*909～ 10*						
	Pouvoir	権　力	**27**	*193～ 5*	○		○			○
	Prédestination	予　定	**27**	*228～ 37*	○					○
	Prédétermination	前　定	**27**	*237～ 44*	○					
	Prémotion physique	前　動	**27**	*260～ 4*						○
	Préoccupation	先入見	**27**	*266～ 8*	○					○
	Pressentiment	予　感	**27**	*326～ 30*						
	Prêt à intérêt	利息附貸借	**27**	*348～ 52*						
(27)	*Prêtres*	僧　侶	**27**	*360～ 5*	○	○	○			○
	Preuve	証　明	**27**	*388～ 95*						
	Principe premier	第一原理	**27**	*424～ 6*	○					○
	Privilège	特　権	**27**	*450～ 6*	○	○	○			○
	Probabilité	蓋然性	**27**	*459～ 70*	○					
	Problème	問　題	**27**	*473～ 7*						
	Profit	利　益	**27**	*522～ 3*	○					

原　項　目　名	同訳名	第3版, 巻数, 頁数		桑	S	J	L	V	AT
Production	生　産	27	515～ 6						○
(28) *Progrès*	前　進(進歩)	27	526		○	○			
Progression	級　数	27	526～ 35						
Prophétie (—phète)	予　言(者)	27	584～ 8	○					○
Proportion	比　例	27	596～ 9						
Proposition	命　題	27	606～ 14	○					○
Propriété	所有権	27	640～ 2	○	○	○			○
Prostituer (—tution)	売　春	27	664	○		○			○
Protestant	プロテスタント	27	672						
Providence	摂　理	27	681～ 92	○					○
Prudence	慎重さ	27	712～ 25	○					○
Puissance	強　さ	27	791～ 4						○
〃	権　力	27	794～ 6	○					
〃 *papale*	法王権	27	798～801	○					
〃 *paternelle*	父　権	27	801～ 5	○					
Puritain	ピューリタン	27	859～ 61	○					○
Pyramide (d'Egypte)	ピラミッド	27	885～ 91	○					
Pyrrhonienne ou Sceptique (Philos.)	懐疑論の(哲学)	27	916～ 26	○					

Pythagorisme	ピタゴラス哲学	**27**	*931～ 59*	○					○
Qualité	質	**28**	*34～ 6*	○					
Quantité	量	**28**	*38～ 43*						
Raison	理　性	**28**	*264～ 6*	○		○			○
Raisonnement	推　論	**28**	*270～ 2*	○					○
Rayon	光　線	**28**	*414～ 7*						
Réaliste	実在論者	**28**	*421*						
Reaux et Nominaux	実在的と名目的	**28**	*422～ 3*						
Réduction	帰　結	**28**	*515～ 8*	○					
Réflexion	反省，反射	**28**	*525～ 33*	○					
Réformation	宗教改革	**28**	*525～ 6*	○					
Régale	王　権	**28**	*567～ 72*						
Régime	体　制	**28**	*583～605*						
Règle	規　則	**28**	*609～ 15*	○					
Relatif	相関的	**28**	*692～708*						
Relation	関　係	**28**	*709～ 12*	○					
Religieux	修道士	**28**	*738～ 40*	○					
Religion	宗　教	**28**	*740～ 60*	○					
Repos	静　止	**28**	*850～ 2*						

原項目名	同訳名	第3版, 巻数, 頁数	桑	S	J	L	V	AT
(29) *Représentant*	代議士	**28** *858～ 65*	○	○	○			○
Reproduction	再生産	**28** *869～ 76*	○					
République	共和制	**28** *877～ 92*	○		○			
Respiration	呼吸	**28** *936～ 60*						
Révélation	啓示	**29** *64～ 7*	○					
Révolution (d'Angleterre)	革命（イギリスの）	**29** *97～ 8*	○					
Rhétorique	修辞学	**29** *151～ 2*	○					
Richesse	富	**29** *201～ 17*	○					
Roberval	ロヴェルヴァール	**29** *281*						
Roi	国王	**29** *316～ 7*	○					
Romain (Empire)	ローマ（帝国）	**29** *347～ 56*						
Romains (Philos. des)	ローマ人（の哲学）	**29** *363～ 7*						○
Rotation	回転	**29** *444～ 8*						
Russie	ロシア	**29** *575～ 81*	○					
Sacrement	秘蹟	**29** *636～ 41*						
Sacrifice	犠牲	**29** *641～ 52*	○					
Sage	賢者	**29** *670～ 1*	○					

	Sagesse	知　恵	**29**	*673～ 4*						
	Sang	血　液	**29**	*923～ 56*						
	Sarrasins ou Arabes (Philos. des)	サラセン人(の哲学)	**30**	*44～ 71*	○	○				○
	Satellite	衛　星	**30**	*80～ 92*						
	Scepticisme (ou Sceptique)	懐疑論(者)	**30**	*238～ 40*						○
	Scholastique	スコラ哲学	**30**	*274～ 88*						○
	Science	科　学	**30**	*306～ 9*	○					
	〃 *de Médaille*	メダル学	**30**	*313～ 66*						
	Secrétaire (de Roi)	書　記	**30**	*512～ 8*						
	Sectes	宗　派	**30**	*532～ 3*	○					
	Sénateur (romain)	元老院議員	**30**	*720～ 4*						
(30)	*Sens*	感　官	**30**	*739～ 71*	○	○				
	Sensation	感　覚	**30**	*773～ 80*	○	○				○
	Sensibilité	感受性	**30**	*780～810*	○	○				
	Sentiment (intime)	感　情	**30**	*823～ 5*	○	○				○
	Serf	農　奴	**30**	*868～ 71*	○					
	Sexe	性	**30**	*1001～ 3*	○					
	Siaka	シャカ	**30**	*6～ 8*						
	Siecles d'ignorance	無知の世紀	**30**	*51*	○					
	Signe	記　号	**30**	*81～ 4*						

原　項　目　名	同訳名	第3版, 巻数, 頁数		桑	S	J	L	V	AT
Société	社　会	**31**	*217～ 30*	○					○
Socratique (*Philos.*)	ソクラテスの(哲学)	**31**	*236～ 45*	○					○
Soleil	太　陽	**31**	*332～ 8*	○					
Sophisme	詭　弁	**31**	*443～ 7*	○					
Souveraineté	主　権	**31**	*573～ 8*	○		○			○
Spinoza (*—ziste*)	スピノザ(主義者)	**31**	*656*			○			○
Spiritualité	精神性	**31**	*667～ 8*						
Stoïcisme	ストア哲学	**31**	*759～ 72*						○
Substance	実　体	**31**	*867～ 70*	○					
Suffisante (*Raison—*)	充足理由	**31**	*970～ 2*						
Suicide	自　殺	**32**	*2～ 6*	○					○
Suisse	スイス	**32**	*15～ 37*			○			
(31) *Superstition*	迷　信	**32**	*71～ 86*	○	○	○			
Surnaturel	超自然	**32**	*129～ 30*	○					
Syllogisme	三段論法	**32**	*192～202*	○					
Symbol	象　徴	**32**	*203～217*						
Sympathie	同　情	**32**	*219～ 28*	○					
Synagogue	ユダヤ教会	**32**	*233～ 7*	○					

	Synthèse	綜　合	**32**	*268～ 71*	○					
	Système	体　系	**32**	*297～310*	○					
	Tabac	タバコ	**32**	*349～ 54*						
	Table	表	**32**	*369～457*						
	Tactique	権　謀	**32**	*503～ 8*						
	Talent	才　能	**32**	*596～ 8*						
	Taxe	税	**32**	*749～ 52*	○					
	Téléscope	望遠鏡	**32**	*821～ 45*						
	Tems	時　間	**32**	*925～ 41*						
	Testament	遺　言	**33**	*134～ 44*						
	Théâtre	演　劇	**33**	*215～ 53*						
	Théisme	有神論	**33**	*262～ 81*	○					
	Théologie	神　学	**33**	*291～ 6*	○					
(32)	*Théocratie*	神権政治	**33**	*287～ 9*	○	○	○			
	Théorème	定　理	**33**	*297～310*						
	Théosophes	接神術者	**33**	*310～ 23*	○					○
	Thomas	トマス	**33**	*367～ 72*						
	Thomasius	トマジウス	**33**	*372～ 90*						○
	Thomiste	トマス主義者	**33**	*390～ 2*						
	Tolérance	寛　容	**33**	*591～600*	○	○	○			○

原　項　目　名	同訳名	第3版, 巻数, 頁数		桑	S	J	L	V	AT
Tradition	伝　統	**33**	*812～ 5*	○					
Tragédie	悲　劇	**33**	*826～ 59*	○					
(33) *Traité de Physiologie*	生理学	**33**	*889～926*						
Tranquillité	平静さ	**33**	*940～ 3*						
Trinité	三位一体	**34**	*195～207*						
Tycho (Système de)	チコ (の体系)	**34**	*467～ 8*						
Tyran (—nie)	暴君 (政)	**34**	*489～ 93*	○	○				○
Valeur	価　値	**34**	*575～ 7*	○					
Vanité	虚　栄	**34**	*601～ 2*	○					
Variation	変　化	**34**	*616～ 25*						
Végétal	野　菜	**34**	*666～ 90*						
Vènerie	犬猟術	**34**	*769～836*						
Venise	ヴェニス	**34**	*840～ 58*						
Véracité	誠　実	**35**	*13～ 4*						
Vérité	真　理	**35**	*58～ 72*	○	○				○
Verre (Verrerie)	ガラス(製造)	**35**	*110～213*						
Vertige	めまい	**35**	*251～ 6*						
Vertu	徳	**35**	*256～ 72*	○	○				
Vibration	振　動	**35**	*351～ 8*						

Victoire	勝　利	**35**	*381～　5*							
Vie	生　命	**35**	*391～406*	○		○				
Ville (fondation de)	都市（の建設）	**35**	*448～　54*			○				
Vin	酒	**35**	*459～　84*							
Virginité	処女性	**35**	*547～　50*							
Vision	視　覚	**35**	*578～　96*							
Unitaire	唯一神教徒	**35**	*666～　90*							
Unité	単　位	**35**	*690～703*	○						
Univers	宇　宙	**35**	*704*							
Universel	普遍的	**35**	*705～　8*							
Voix	声，投票	**35**	*754～　71*							
Voler	盗　み	**35**	*787～　92*							
Volonté	意　志	**35**	*800～　2*	○						
(34) *Vraissamblance*	真実らしさ	**36**	*8～　26*	○						○
Usage, Coutume	習　慣	**36**	*79～　88*							
Vue	視　力	**36**	*154～　64*							
Vuide	真　空	**36**	*177～　81*	○						
(35) *Wolstrope*	ウォールストロープ	**36**	*277～　86*							
Zenda Vesta	ゼンダ・ヴェスタ	**36**	*398～404*	○						○

原　項　目　名	同訳名	第3版, 巻数, 頁数		桑	S	J	L	V	AT
Zendicisme	禅思想	**36**	*404～ 5*						
Zoroastre	ゾロアストル	**36**	*475～ 9*						
Eloge de M. le Président de Montesquieu	モンテスキューへの讃辞	**36**	*514～ 36*						
Eloge de M. de Marsais	ド・マルセーへの讃辞	**36**	*537～ 55*						
Eloge de MM. Lenglet et Mallet	ラングレとマレへの讃辞	**36**	*555～ 60*						
Contrat	契　約	**36**	*1010～ 11*						
(36) *Etat*	国　家	**36**	*1016～ 8*						
Foi	信　仰	**36**	*1019～ 20*						

資料 II　註

1) 桑原氏編の一覧表では，*Astronomie* と *Astrologie* とが混同されている．*Astrologie* は占星術で，重要なのはダランベールの執筆した前者である．

2) この項は備考欄の○印からも分るように，各テクストがいずれもとりあげている．ディドロの書いた項目中でも最も有名なものの一つである．ただ *Soboul* のテクストでは，この項が落ちて，かわりに "*Autorité dans les discours et dans les écrits*" という項が代りに収められている．これは *Soboul* のテクスト選択の基準が，"*Critique dans les sciences*" の項に示されているような，科学にもとづく批判的な精神を，『百科全書』全体を貫く一つの重要な柱とみなして，この項に関連する項目をとくに意識的にとりあげていることから来ている．*Autorité politique* が多くのテクストに収められているのは，この項目自体の重要さによることはもとよりだが，それが比較的短いものであることにもよるだろう．

3) この項目は，他のディドロ執筆の項のように星標 (* 印) も附けられておらず，全く無記名のものとなっているが，ディドロの執筆したものであることが明らかとなっている．『百科全書』全体の根本志向の一つに，その宗教への批判があると考えられるので，その点から見てこの項目は全体の中で非常に重要である．内容にわたる点については本文を参照されたい．(*J. Proust*; *Diderot et l'Encyclopédie, p. 530 et p. 532*)

4) 認識乃至知識の問題については，『百科全書』家たちは，ベイコンの学問論から強い影響をうけている．『百科全書』第1巻の巻頭には，とくにベイコンの学問分類にならった学問分類表と説明が加えられている．(*t. 1, p.p. 1～10, Système figuré des connoissances humaines, et Explication détaillée.* 含む, *Système de Bacon*) 内容上の問題については，同じく本文で触れておいた．

5) マルモンテル執筆．その中心部分，すなわち "*Critique dans les sciences*" はとくに重要．註 2) で触れたように，科学の方法を人間的事象に適用して，現存するものの不合理を鋭くえぐり出してゆこうというこの方向は，ディドロ執筆の "*Aigle*", "*Agnus scythicus*", "*Alcatrace*", さらには "*naître*", "*Corruption*" 等の項目のうちにもはっきりと認められる．

6) *Encyclopédie* 第3版にはときどき頁づけの誤りが見出されるが，この部分もその一例である．この場合，817 頁が二枚あるわけである．他にも，例えば "*Hobbisme*" の場合にも，その項目の終りの頁づけは 592 頁となっているが，実質的には 612 頁でなければならない．

7) この項の筆者はダランベールで，彼の (*Traité de dynamique, 1743*) と全く同じ内容を圧縮して述べたものと見なしうる．ダラ

ンベールの力学思想の意義は，それがはじめてニュートン物理学をフランスに持ちこんだ点にあるとされている．(桑原編，前掲書第七章 一，二，とくに 227 頁以下参照.)

8) この項目は『百科全書』中の重要項目の一つと見なされる．ディドロの哲学上，宗教上の立場の基本的な側面がここで語られている．内容的な問題については本文参照．"*Thomasius*" の項に，他の類似の項に比してとくに多くの頁がさかれているのは，トマジウスが折衷主義的な神学者であったためである．桑原氏編の研究がこれに (同書 199 頁でのわずかな論及を除いて) 殆んどふれていないのは理由がわからない．そこでの論議の包括性から見ても，この項には『百科全書』の思想をとく鍵の一つが隠されていると思われる．多くのテクストがこの項を，部分的にではあるが収めているのもこのために他ならない．(*Soboul*; *Textes choisis p. 78 cf.*)

9) ダランベール執筆．ダランベールの分担は自然科学関係が主体で，その領域では圧倒的な分量を占めているが，これは彼の数少ない哲学史関係の項目の一つで，ここでのスコラ哲学批判は有名であり，さすがダランベールと思わせる鋭さを持っている．同じくダランベール執筆の "*Collège*" についても同様のことが言える．このスコラ哲学批判におけるダランベールはまさにデカルトの弟子である．(*cf. J'ai, lu l'essentiel, Textes choisis par A. Pons*; *p.p. 169~75*)

10) ルソーの執筆．経済的事象を政治的視野の中でとらえてゆくというルソーの特徴はここでもすでによく現われているように思われる．ルソーの『百科全書』への参加は限定されたものであり，また，中途にしてディドロらと袂を分ったことはよく知られている．百科全書家とルソーとの思想上での異同は大きな問題点の一つだが，一応両者を区別するのが妥当でもあり，また『百科全書』自体の理解のためにも必要と考える．(*cf. Hubert*; *Rousseau et l'Encyclopédie, 1928.* とくに，*Chap. II, VIII* および，桑原氏編前掲書，157~8 頁など参照,) (本文でもこれらの点には若干ふれておいた.)

11) この項目自体についての専門的な評価はできないが，当時のフランスの選挙の形態，また各地方ごとの議員定数などのくわしい資料がもりこまれているこの項目は，同様，革命前の各地の高等法院についての詳細な叙述を含んでいる "*Parlement*" の項などとともに資料的な価値をも持ちうるであろう．勿論，百科全書家たちの，イギリス議会制度その他についての政治的見解をとらえる上にもこれらは重要である．

12) ディドロ執筆のこの項目は，ダランベール執筆の "*Dictionaire*" の項，さらにディドロの "*Editeur*" の項などとならんで，百科全書家たちの百科全書というものに対する基本的態度をうかがわせる叙述を含んでいる．このテクストは多くの抜萃集におさめられており，『百科全書』中の最も有名な，また最も重要な項目の一つであるといえよう．ディドロはこの中で，百科全書の企画の

目的と，それを貫く根本的な精神を明確に描き出している．

13) 『百科全書』の芸術論上の立場を考える際に，ディドロとならんで重視されているズルツエル (*Sulzer*) の執筆項目とされている．とくに，マルモンテル編集の補巻では，彼の寄稿論文の比重は大きい．これらの点について，またズルツエルの思想の特徴については，桑原氏編の研究のうちに比較的詳細な叙述がある．(桑原氏編，前掲書，*30, 41, 267～9*，とくに *274～80* の各頁参照．ディドロ執筆の "*Beau*", "*Imitation*" などの項目との比較は一つの重要テーマとなるだろう．

14) ケネー執筆．この項目および "*Grains*" の項目等を通じて示されている重農主義的傾向は，ケネーを通じてディドロにも強い影響を及ぼし (ディドロの書いた "*Agriculture*", "*Homme politique*" などの項参照)，『百科全書』全体の経済思想の主流をなしているとされている．これらの論文は，『経済表』に至るまでのケネーの思想の発展を把える上でも極めて重要な資料である．(桑原氏編，前掲書，157 頁参照.) なお，ケネーはこの他に "*Evidence*" という項目も執筆している．(*cf. Soboul*; *Textes choisis, p.p. 96～8, 113, 128～9.*) (*cf. H. Denis*; *Deux collaborateurs économiques de l'Encycl., Quesnay et Rousseau, Pensée 1951*)

15) ダランベール執筆．この項目での演劇，とくに喜劇の地位をめぐってのダランベールの教会批判が，ルソーの反論をまねき，やがてルソーの脱退にまで発展し，さらには，これに嫌気のさしたダランベール自身の脱退にまで発展して行く端緒となったことは有名なエピソードである．(*Soboul*; *ibid. p.p. 110～2.* および，桑原氏，前掲書，25 頁，および，;"*Comédien*", "*Théâtre*" などの関連項目参照，——*J'ai lu l'essentiel, Textes choisis par A. Pons, p. 179 cf.*)

この結果，1757 年の初版第 7 巻の刊行後，ディドロはジョクールとともに孤立状態に立たされることとなった．ルソーのダランベールへの手紙が 1758 年，ダランベールの脱退が 59 年であり，この間には，エルベシウスの弾圧をうけた書物 "*De l'esprit*" が刊行されている．また，初版では，この巻以後，すなわち第 8 巻からは，一時編者の名が匿されることとなったのである．なお第 3 版，少なくとも北大所蔵の版では，編者が名が *anonyme* の巻は見当らない．

16) ヴォルテール執筆の項目中の代表的なものの一つ．ヴォルテールとディドロとは互いに相手を嫌い合っており，ダランベールが間に立って苦心しながらこれらの項目の執筆にこぎつけたと言われている．このような違和感が単に感情的な次元に止るものでなかったことは，この項目と，ダランベールの『序論』での叙述，および，ディドロの書いた歴史関係の諸項目を比べれば明らかである．それらの間には少くともその歴史観の類的同一性とともに，その種差が感じられる．なおディドロの歴史観の有力な手掛りとして，桑原編，前掲書 (202 頁以下) で援用されている "*Luxe*" の項は，*Proust* の研究によって *Saint-Lambert* のものであることが明らかとなっている．(*J. Proust*; *loc. cit. p. 536 cf.*) 『百科全書』の歴史観は，もっとも統一的にとらえにくに側面の一つ

となるであろう．それを解く鍵は，自然と人間についての彼らの考え方を根本的に検討することによってのみ与えられるだろう．言いかえれば自然の歴史と人間の歴史についての彼等の把握を解明してゆくことからしか，その真の姿はつかみえないのではなかろうか．

17) 桑原氏編，前掲書では，この項がディドロの書いたものとして扱われているが (同書, 68, 170 頁など)，しかし，*Proust* の研究でも，この項はディドロ執筆の分とは認められておらず，また，そもそもアッセザ版の全集中にも入れられてはいない．*Soboul* のテクストでも，*Pons* のそれでも，この項はディドロのものとしては扱われていない．それ故，桑原氏編同書のうちで，ディドロのこの方面での思想をうかがわせる代表的な項目 "*Art*" などと，この項目の観点とのずれが指摘されているのも，いわば当然の結果であるにすぎない．(同書 172 頁註参照) この項目が特に有名なのは，一つには，のちの『資本論』での，マルクスのマニュファクチャー論に引用された有名な文章の骨子がそこに見出されるからである．*Soboul* によれば，"*Manufacture réunie*" (集合マニュファクチャー) に対して，"*Manufacture dispersée*" (分散マニュファクチャー) の利点を主張するこの項目の立場は，その限界に，執筆者の *timidité* にむしろ注目すべきだとされている．(*Soboul*; *loc. cit. p.p. 158～9*)

18) ダランベール執筆．この項および "*Nature*" の項，また，多くの自然科学関係の項目のうちに見出されるダランベールの哲学上の立場と，ディドロの立場との差違は，百科全書そのもののうちでは必ずしも目立ってはいない．『ダランベールの夢』や，『ダランベールとの対話』などを通じて述べられた，ディドロ自身のダランベールへの批判，また，前者の唯物論と後者のそれとの差違も，後に至って顕在化したような姿では，『百科全書』の諸項目のうちには読みとりえなかった．全体として言えば，『百科全書』の諸項目に関するかぎりでは，たとえば『序論』でのダランベールがきわめて控え目に，穏健に論じているのと同様に，ディドロもその宗教批判等においてかなり控え目であること，またベイルをうけ継ぐような懐疑論的な，*ironique* な *ton* がその論調にうかがえる点が目につく．そして，二人のうちではダランベールの方が，デカルト主義の伝統により近いように見える．これらの点については，*Rivaud*; *Histoire de la philos. t. IV. Chap. V. p.p. 62～73*, とくに，*Chap. VII, p.p. 96～105* 参照.

19) この項目は，桑原氏編の前掲書でも，また *Pons* の *Textes* でもディドロの書いたものとされているが，*Proust* の研究でははぶかれている．(*Proust*; *loc. cit. p. 536 cf.*) しかし，ここでの手仕事と，それに従事する手工業者の重視などは，"*Art*" の項などのディドロの思想とも対応している．ディドロは自ら職人の子として，このような仕事に人一倍の理解を持っていたことは確かである．『百科全書』はその表題の語っているとうり，科学，技術ともに，この "*Métier*" のための辞典でもあろうとしているのである．

20) ルソー執筆の項目.

21) 『百科全書』全体の自然主義的傾向から見て，ダランベールの書いたこの項目は重要項目の一つと見てよいだろう．そして『自然』や『物質』をダランベールが，『人間』を結局はディドロが書いたという，この分担の仕方のうちに，両者の協力の形態が自から示されているとはいいえないだろうか.

22) ジョクール執筆の項目．『百科全書』が "*France*" についてさいた頁数のほぼ 10 倍の頁数を "*Paris*" のために費しているのはいかにもフランス的である.

23) すでに註 11) でも触れたように，この項目についてのここでの詳しい叙述は，革命にさき立ち，また革命の勃発に当っての高等法院の政治的役割からみても，恐らく貴重な資料となるものと思う.

24) ディドロ執筆．この項目は，既に書かれた "*Aristotélisme*" の項への補足として書かれたものである．なお，若干の例外を除いて，哲学史関係の項は殆んどディドロによって書かれている．その中には，哲学史的な叙述を通じて，同時に，自己の哲学上の立場を述べているものも多く，ディドロの哲学思想解明の重要な手掛りとなるような項目が多い．"*Eclectisme*" をはじめ，"*Pyrrhonienne*", "*Pythagorisme*", "*Ethyopiens*", "*Hobbisme*", "*Sarrasins ou Arabes*" などはその一例である．桑原氏編著は，これらの項目を全体として軽視している．"*Cartésianisme*", "*Locke*" などの項目も一覧リストから落とされており，また文本での言及もこれらについては一般に少ないように見うけられる．(*cf. R. Desné*; *L'apparition du mot ≪philosophe≫ dans l'œuvre de Diderot. Annales historiques de la Révolution Française 1963.*)

25) この項目と次の項目はディドロの執筆．ディドロの『百科全書』に臨む姿勢は全体として，哲学的であり，その企画自体が，"*Encyclopédie*" の項での発言によれば，この『哲学の世紀』の確認のために立てられたとさえ言えるほどである．従って，『哲学』，および『哲学者』はいわばいい意味の言葉として使われており，自ら圧迫に会いながら，『百科全書』の形而上学部門を分担して，多くの項目を執筆し，しかもあまり好遇されることなく，ときにはディドロからさえその凡庸さを笑われた，*Yvon* の立場に象徴されるような『形而上学』の不遇とは対照的に，『哲学』は，丁度今日の『科学』のような好い待遇を『百科全書』では受けているわけである．しかし，ここでも強調されるのはやはり合理的精神（理性）と批判的精神であり，しりぞけらるべきものは権威とドグマと，固化した体系の精神であるとされる．(*Soboul*; *loc. cit. p.p. 183～9*, *Proust*; *loc. cit. p. 537*, *note* 〔127〕 *cf.*)

26) ここでディドロは宗教の起源論を行なっている．彼は『万物の第一原因』への礼拝は，そこからの堕落の諸形態の一つとしてのギリシャ的多神論や，『偶像への礼拝』よりもむしろ歴史的に先行するものと考え，したがって，多神論から『唯一の神』の観念への

進展は必然的であるとともに正当でもあると説く.(『神の唯一性の観念は極めて自然で,また正しい理性に大変よく適合していて……』と;彼はこの項目の中で云っている.) ここにも,後のディドロのスピノザ主義的,汎神論的自然観と,また理神論的,自然宗教的傾向を見出すことができるだろう. なお,ここでも *Encyclopédie* 第3版は頁づけを誤っており,実質的にはこの項の頁づけは,*t 26* の *952* 頁のはずである.

27) アツセザ版には載っているが,*Proust* も指摘しているように (*Proust*; *loc. cit. p. 538, note* 〔*128*〕), ドルバック執筆のもので,重要項目の一つである. ここに見られるのは,『百科全書』全体の基調をなす宗教批判の,最も過激な形での現われの一例である. この項目は,はじめディドロのものと考えられていたが,彼の温和で皮肉な宗教批判から見て,これは明らかに過激すぎる. (*Pons*; *loc. cit. p. 479* をも参照)

28) のちに,チュルゴ,コンドルセによって明確となったような進歩の史観は,『百科全書』の底流をなす思想の一つと見なしてさしつかえないが,この項目の叙述からはその点は全くうかがえない. ここでは *Progrès* は物理的な意味,せいぜい学問研究における『前進』でしかない. (*cf. Soboul*; *loc. cit. p.p. 200～1*)

29) アツセザ版に所収の項目だが,ドルバックの執筆したものであることが判明している. ここでは,他の多くの場合と同様に,非常に穏健な政治哲学が語られている. 後のルソーによる批判のかげすらない,代議制と,制限君主制への全面的肯定がここには見出される.

30) 『百科全書』全体の認識思想には,コンディアックの感覚論が影を落しているといえる. 後のディドロの感覚についての物活論的なとらえ方は,レーニンらによってとりあげられて重要な意味を与えられることになったが,ここおよび次の "*Sensation*" の項などでの論議はむしろ全体として古典的であり,唯物論の基本的立場 (客観的実在の優先) は守っているが,同時に,*Soboul* もいうように,著しく機械論的である. むしろ,デカルトの *bon sens* の展開としての "*sens commun*" の部分の方が生彩があるとさえいえるだろう.

31) ジョクール執筆の項目. 前述したように,百科全書家たち,とくに,ディドロやジョクールらの背後にはベールがいるのであり,そのベールはモンテーニュの懐疑主義的個人主義の系譜の上に立っている. 『百科全書』では,直接,ベール,モンテーニュを論ずるための項目は見出されないが,諸項目のいたるところでベイルからの引用が見られ,その影響のなみなみならぬことを思わせる. 迷信の批判はディドロらの仕事の重点の一つであったが,ここでジョクールは,モンテーニュを全面的に援用しつつそれを行なっている. 迷信の批判は "*Tout excès de religion en général*" への批判であり,一切の宗教的 *Fanatisme* への批判であった.

『独創性の全くない点がその唯一の独創的なところ』と評されたジョクールは，その執筆項目数において，また終始ディドロと行を共にした少数の人々の一人として，百科全書家中ではもっとも注目すべき人の一人であるが，"*Athéisme*" などの項でのイヴォン神父ほどではないにしても，その議論の平板さはかくせない．ただジョクールの場合は，イヴォンとことなり，根本的な考え方がディドロと共通である点にその論議の特徴がある．ディドロから，その天才の高揚を引き去ったものが，ジョクールなのである．

32) ドルバック執筆．最も攻撃的な宗教批判の項目の一例である．1762 年のジェジュイットによる攻撃の一因となった．(*Soboul*; *loc. cit. p. 247. cf*)

33) *t. 25* の "*Physiologie*" の項への補足として書かれた項目で，百科全書家たち，とくにディドロの生理学の重視の現われと見てよいだろう．『百科全書』を貫く『生理学主義』(桑原氏編，前掲書，第八章，255 頁参照) は，その図版での生理学，解剖学関係の重視にもはっきり現われている．ディドロの唯物論の根底には，生理学的人間観があることは明らかだ．そのことは，"*Homme*" の項を一見しただけでもすぐ分ることである．(*L'Encyclopédie et le progrès des sciences et des techniques, 1952* 所収の，*J. Rostand* 論文, *p.p. 10～*, および, *p.p. 150～* をも参照.)

34) この項は桑原氏編のリストではマルモンテルのものとなっているが，*Proust* ではディドロのものとなっている．(*Proust*; *loc. cit. p. 538*)

35) ニュートンの生地の名で，この項目は "*Newtonisme*" への補足として書かれている．*Newton* 重視の現われの一つであろう．

36) この三つの項は 36 巻の巻末に附加された初版の本文 (*t. I～XVII*) への "*Additions II*" 所収のものである．上の 3 つの "*Eloge*" が "*Additions I*" を形成している．ここでの "*Etat*" の補足はベイコンの国家思想についての，また "*Contrat*" はルソーの観念の説明である．